

聖徒の道

1978年1月20日発行（毎月1回20日発行） 第22巻第1号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

1 1978





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレン
リグラント・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・シンクレア
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バック
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・シンクレア
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

も く じ

救い主が導かれたごとくに……	N・エルドン・タナー	1
指導者に従う者……	ロジャー・メリル	5
サウニアテュ——	フライアン・K・ケリー	9
世に巣立つ準備		
日本系図探求の概要……	グレッグ・ガブラー	15
安全な道……	ボイド・K・バック	20
ホフマンさん……	エリザベス・レーン	21
ぬりえ……		24
空気があるってなぜわかる?……	マーティン・J・ガトニック	25
あらいくまのおじさん……	マレイ・プリングル	26
ジョセフ・スミス——	ウィリアム・E・ベレット	30
指導者の5つの特質		
アジアに散乱したイスラエル……	スペンサー・J・パーマー	35
ローカル・ニュース……		44

聖徒の道 1月号

発行所	末日聖徒イエス・キリスト教会 東京都港区南麻布5—8—10
印刷所	株式会社 精興社
配 送	東京ディストリビューション・センター 東京都世田谷区上用賀4—9—19
定 価	年間予約1,700円 1部150円 海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0—41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

末 日聖徒イエス・キリスト教会において、指導者として、あるいは教師として（以下、一方の言葉が出てきても両方を指すものとする）成功を取めるためには、まず自分が神の霊の子であるということを認識し完全に理解することが大切である。それと共に、自分が教え導いている人々もやはり神の霊の子であることを理解しなければならない。また同時に、教え導かれている人々も自分が神の霊の子であることに気付き、理解すると共に、そうした知識が自分の生活においていかに重要かということを知ることが大切である。人は皆、神が一人一人に関心を払っておられること、人に歩むべき道を歩んで生活して欲しいと望んでおられること、そして人が耳を傾けさえすれば喜んで祈りに答え、可能な範囲で助けて下さるということを、深く認識する必要がある。

指導力は必然的にある種の大胆さを伴うと言った人がある。結局のところ、指導力というのは、勇敢に前進することであり、人より先んずることであり、暴徒や大会衆や無表情

な聴衆の前に立つことであり、疑念を抱く人の冷やかな目にさらされることである。

人は皆、気付いているいないにかかわらず、指導者である。つまり、他の人々の生活に影響を与えているのである。従って、どのような指導者になるか、またどのような影響を与えるかということが問題になる。

人は皆、自分がどのような人間になるかを自分で決めなければならない。イエスの言われたように「私に従って来なさい。私の行ないを見て、その通りに行ないなさい」と言える人物になりたいかどうか、自分で決心しなければならない。これは、自分が真理と正義の道に添って指導していることを自覚していてこそ言える言葉であって、これこそあらゆる指導者が目標とすべきことである。

イエスが導かれたごとくに導こうとする時、私たちは数多くのチャレンジに遭遇する。こうしたチャレンジに應えるため、私たちはまず、キリストが指導者のひな型であることを認識する必要がある。キリストの生涯と教えが記録されている聖典を研究すると、私たち

救い主が導かれたごとくに

第一副管長

N・エルドン・タナー



はそこから、神のみこころにかなった指導方法について実例を学ぶことができる。主が導かれたごとくに導くためには、聖典を研究し、理解し、それを生活に応用することが大切である。ニーファイが言ったように、「すべての聖文を私たちのためと見立て」(I ニーファイ 19:23) るようにし、また主の言われたように、「神の口より出ずるすべての言によりて」(教義と聖約84:44) 生きる必要があるのである。

ニーファイ第三書に、次のように記されている。

「すべてわが名のために迫害を受くる者はその住むべき所天の王国なるが故にさいわいなり。

わがために人々汝らをののしり迫害をし、汝らに就き偽りてさまざまの悪しきことを訴うる時汝らさいわいなり。

何となれば、汝ら後に天に於て受くる善き報い大きければ大いに喜び楽しむべければなり。汝らより前の予言者たちも汝らと同じく迫害せられたり。

まことに、まことに汝らに告ぐ、われは汝らを世の塩のごとき者とすれど、塩もし塩気を失わば、何を以て世に塩の味をつくることを得べきか。その塩気をなくしたる塩はもはや何の役にも立たず、ただ捨てられて人々に踏みつけらるのみ。

見よ、われは汝らがわれを信じ、自分の罪を悔い改め、また真にへりくだりたる心と悔いる精神とを以てわれに來れと言う御父の律法と命令とを今汝らに伝えなれば、汝らはすでに目の前にこの命令を有てり。而して、古き律法はもはやその目的を達して効果なきものとなりなれば、

われに來りて救いを得よ。まことにわれ汝らに告ぐ、われが今汝らに下したるこの命令を守らずば、決して天の王国に入るを得ず。」(III ニーファイ 12:10—13, 19—20)

キリストがこの世に降臨して、全人類に再び天の御父のもとで命を得させるための救いのみ業に着手された時、主は「この律法には従おう、しかしあの律法には従うまい」とは言われなかった。また、戒めに関しても、「これは行なおう、しかしあれは行なうまい」と

は言われなかった。主は、ゲッセマネの園であれ程もだえ苦しみながらも、最後まで耐え忍び、人に不死不滅と永遠の生命を得させるためにその命をささげられたのである。

それゆえ、私たちは神の戒めに従い、守るようにすることが大切である。しかし昔から言われているように、従順とは隷従することではなく、指導者としての重要な特質のひとつである。

数々の訓戒、すなわちイエス・キリストの教えに従わないために、偉大な指導者にならない人がいる。イエスが導かれたごとくに導くためには、キリストが天の御父に従われたように、私たちはまず第一に、キリストに従うようにしなければならないのである。私たちは、私がこれまで述べてきたような、永遠の目標を常に心に留めておく必要がある。そして神の霊の子として、さらに神に似た者となり、やがて完全な者とならなければならないのである。ただキリストの存在を信じるだけでなく、キリストに従おうではないか。キリストを礼拝し、常にその教えに従順になろうではないか。

ジョセフ・スミスが、どのようにしてその民をうまく治めているのかと尋ねられた時、その返事はこうであった。「私は人々に正しい原則を教え、人々に自らを治めさせる。」(*Journal of Discourses* 「説教集」 10:57) これこそ、主のみこころにかなう指導の原則である。つまり私たちは、福音の証と理解とをもって正しい原則を教えているという確信を持たなければならないのである。そして福音の原則を理解するようになれば、その過程に比べて、最終的にはるかに大きな自由と成長とがもたらされるのである。

教会の指導者は同時に教師でもある。教師の用いる最良の教授法のひとつは、模範である。そして、この教授法こそキリストがいつも使われたものである。私たちが意識しているにいかかわらず、模範によって教える事柄は、意図的に言葉によって教える事柄よりも、はるかに強い説得力を持つ。そして、その模範を目にする者に、いつまでも心に残る深い印象を与えるのである。

有能な指導者や教師になるには、愛を示さ

なければならない。また自分が教えようとしている相手に対して、実際に愛を感じなければならぬ。愛の力ほど、人の心を強く動かす力はない。キリストは、弱者も、罪人も、義人も、ことごとくの人を愛された。時には最も愛を必要とする人々は、愛されるに最もふさわしくないとと思われる人々であることがある。ある人の行ないがたとえ認められないものであったとしても、それでもなお私たちはその人に愛を示さなければならないのである。

そのような場合、指導者には、忍耐と理解が求められる。指導者は、いつでも速やかに行動がとれるとは限らない。従って、決して過剰な反応を示してはならない。あらゆる人が指導者の歩調に合わせて進めるわけではないからである。ジョセフ・F・スミス大管長は次のように言っている。

「指導者たちが、短気になったり、暗い気持になることは許されない。時には待つことは、行動することと同じくらいの勇気が必要とする。だから、神の民の指導者も、民自身も、人生の進路を乱す問題が生じた場合、そのすべての解決方法をすぐに知らなければならないと感じてはならない。」（「福音の教義」第1巻 p.193）

指導する上で、もうひとつ非常に大切なことは、委任ということである。委任する相手には、それ相応の責務を与えなければならない。そうした責務を与えることは、指導者の義務である。また委任を受けた人はその責務を引き受け、教えられるままにその義務を行なう決意をしなければならない。また、責任と同時に権限も与えなければならない。ソクラテス（紀元前470—399年、ギリシャの哲学者）はかつて次のように言ったと伝えられている。「責任が与えられた以上、それを果たさないくらいなら、死ぬ方がまだましだ。」

指導者ならば、人にいったん責任を与えた以上、その人の仕事に手出しをしようとしてはならない。かつてリー大管長は次のように語った。「彼らに出来る限りなんでもさせなさい。あなた方指導者は彼らの後ろに立ち、その方法を教えればよい。人に責任を負わせ、その責任をどのように果たしたらよいかを教

えること、私はそこに成長の鍵があると思う。」

人々に自由に仕事をさせなさい。決して批判することなく、成功をたたえ、努力するよう勧めなさい。すべての人に、各自の召しがいかに重要かを理解してもらわなければならない。指導者というのは、決して親父的な存在であってはならない。救い主が教えられたように、人々に仕える者でなければならないのである。主は言われた。「あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない。」（マタイ23：11）さらに主は、弟子たちの足を洗うという偉大な模範を示し、こう言われた。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」（マタイ23：12）

私はグラント大管長の言葉をよく覚えている。大管長は常々、自分に行なう準備のできていない仕事は決して他の人に頼まないと言っていた。

立派な指導者は、自分に従って来る人々や自分が仕えている人々の福利に関心を払うものである。私が、カナダのアルバータ州政府で勤務していた頃、難しい問題が数多くあった。そのような時、いつもこのように自問したものである。「州にとって何が一番大切だろうか。また影響下にある人々や担当部局の職員にとって何が一番大切だろうか。」それから私は、担当部局のいろいろな課の指導者と、また特にその影響を受ける人々と諸々の問題について話し合いをした。そして彼らに、自分にも少なくともその責任の幾分かがあると感じさせたのである。その後で私はいつも主のもとへ行って導きを求め、その導きを受けると、それまでは考えもつかなかったような決定を下すことができた。

私たちは指導者として、「これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命をもたすなり。」（モーセ1：39）と主が言われたことを深く認識しなければならない。また主は言われた。「この故に汝らは主の代理人なれば主の用向を有する者なり。されば、何事にまれ主の意に従いて汝らの為すところはすなわち主の業務なり。」（教義と聖約64：29）

確かに、私たち指導者は、主の用向を有て
る者である。そして正しい原則を教えること
によって、一人一人の成長に最大限、心を配
らなければならない。まだその人に、不死不
滅と永遠の生命を受ける備えができるよう、
努めて導かなければならない。私たちはこれ
を模範と教えることによって行ない、その後、努
力しようとする人々を助け支えるのである。
しかしながら、私たちは、その人が賜である
自由意志に従って自ら決定を下し、自分自身
を治めるようにしむけなければならないので
ある。

管理人の職に関して主がジョセフ・スミス
に与えられたみ言葉を心に留めておこうでは
ないか。「主はあらゆる管理人の手により、今
もとこしえにも管理人の職に関する報告書を
差出すことを求むる。」(教義と聖約72:3)

指導者がある責任を支える場合、その責任
について、その責任の及ぶ範囲を明確に規定
した上ではっきりと理解してもらう必要がある。
それから、責任を与えた相手の進歩のため
に、あるいは最終的な報告のためにある日
時を設定し、それまでの期間何ものにも妨げ
られずに行動し、責任を達成できるようにす
る。また責任を受けた人はいつも指導者に報
告をすべきであり、指導者は報告を求めるべ
きである。

教会の指導方式に従えば、大切な報告の場
は個人面接である。面接をする人と受ける人
の間に理想的な関係があれば、これは、双方
にとって極めて実りの多い機会となるはずで
ある。そこでは、自己評価の機会が与えられ、
話合いも、腹を割った建設的なものとなるか
らである。そこは、援助を与え、受けるため
の理想的な場である。

教会だけでなく、政界や実業界での私の経
験から、このように権限を適切に委任するこ
と、背後から支援すること、そして報告を受
けることが非常に重要であることを強調して
おきたいと思う。

委任にあたって、キリストが踏まれた7段
階について考えてみよう。

第1: イエスが設定された教会の組織は、
権限の委任という仕組の中で運営されていた。

第2: 委任にあたって、イエスは、その責

任が容易に果たせるなどとは決して言われな
かった。むしろその責任がいかに素晴らしく、
またやりがいのあるものであるかを説明され
た。

第3: イエスは、御自分が召された人々に、
その義務をはっきりと教え、理解させた。

第4: イエスは、御父がイエスに対してな
さったように、権能を委任した人々に全幅の
信頼をおかれた。

第5: イエスは召された人々に対して誠実
であり、また人々にも誠実な者となるよう求
められた。

第6: イエスは責任を委任した人々に多く
のことを期待し、同時に多くのものをお与え
になった。

第7: イエスは、指導者は責任を委任され
た人々の仕事の経過を見守り、その報告を受
けるべきであると教えられた。また、ほめたり、
必要とあらば愛の心をもって叱ることも
必要であると言われた。

私たちが偉大な者になれる望みがあるとし
れば、それはただひとつ、キリストの模範に
従うことである。それゆえ、偉大な指導者と
なるためには、次のことを行なわなければならない。

第1: 完全な指導者の模範として、私たち
の救い主を目標とする。

第2: 教師としもべの役割の関係を理解し、
受け入れる。

第3: 正しい原則を学ぶため聖典を研究す
る。

第4: 導きを求めて祈り、耳を傾け、受け
た答えに従う。

第5: 一人一人が自分自身を治めることが
できるよう助ける。

第6: 一人一人に、自分の仕事に対して責
任を持たせる。

第7: 適切なほめ言葉を言う。

第8: 自分の教えたことと矛盾しないよう
に、自分でも模範を示す。

第9: 神の予言者である大管長の声に耳を
傾け、その助言と模範に従う。

指導者に従う者

ロジャー・メルル



そこは彼がいつも思索と祈りで過ごす場所であった。庭に置かれた揺り椅子にゆったりと腰をおろした伝道部長の姿は、赤い夕日を背にくっきりと浮かび上がり、伝道本部の裏のベランダからは眼下に広がる町が美しく見えた。しかし、伝道部長はそれも目に入らぬ様子で、いまだ福音を知らずに真理を渴望している大勢の人々のことを考えていた。

カードン長老が2週間前に解任され、新しい補佐が必要だった。120名の宣教師の中から、だれを召したらよいだろうか。ゾーンリーダーをひとりずつ思い浮かべた。そうするうちに、ひとりの長老に思いが絞られてきた。「いろいろな点で彼が一番経験豊かでうってつけだ。地区の宣教師たちも彼によく従う。けれども彼は私との間でいろいろな問題を引き起こしている。立派な仕事はするが、自分のしたことを報告しないことがよくある。いつも不意打ちにあって、何度か計画を変更しなければならなかった。彼に何かを頼んでもその通りにはせず、自分の思い通りにして、それが本当に大切だと私を説得にかかる。これまで彼と随分話したが、私の考えを受け入れようという様子が見えない。いや……主には別の長老を推薦した方がよさそうだ。」

有能でありながら不従順という欠点のために将来を狭められる指導者が非常に多い。そのような指導者はやがて自分に全幅の信頼が寄せられていないことに気づき、また自分の提案が他の指導者から拒否されることを不快に思うようになる。人々の信頼を勝ち得、人々に影響を及ぼすことは、指導者にとって非常に大切な要素である。しかし、このことは指導者訓練の際に必ずと言ってよいほど見落とされている。

指導者の信頼を得るためにどうすればよい

かについては、聖典に数多くの教訓がある。イテル書の数節には、立派な弟子となるために必要な過程が記されている。ジェレドの兄弟というと、私たちは意志強固で忠実でたくましいジェレド人の指導者を想像する。けれどもそれらの特質はただ授けられたのではなく、長年の間、試練にあいながら身につけたものである。モルモン経のイテル書を開いて、2章14節から読んでいただきたい。「第四年の終りに主はまたジェレドの兄弟のところに降って、雲の中に立ちながらかれと親しく話したもうた。主は三時間ジェレドの兄弟と話して、かれが主に祈ることを怠ったのを懲しめたもうた。」

祈りを忘れて主に叱責された人と、主がイテル書3章9節で「これまで汝の如き大いなる信仰をこめてわが前に来りし者なし」と言われた人とは雲泥の差がある。ジェレドの兄弟の一生のどんな出来事が、この差違と成長を生んだのであろうか。2、3の聖句が、ある重要な原則を語っている。

ジェレドの兄弟は主に咎められたあとで、

「その罪を悔い改めて、一しよにきた者たちのために主に祈った。」(イテル2:15) この記録から、彼のすぐれた特質は明らかである。神に叱責されてからのこの謙遜な態度は、彼が偉大であったことの証である。

ジェレドの兄弟はすべての点で主に従順に従おうと決意し、立派な指導者に成長する道を歩み始めたのであった。その時、主は彼に舟を造るように命じられた。そこでジェレドの兄弟は指示に従い、主の試しに立派に応えたのであった。(イテル2:16—17参照)

その舟の建造がはかどったところで、ひとつの問題があった。そこで彼は主のもとへ行き、どうすべきかを尋ねた。「主よ、主がわれに命じたもうたることをわれはみな為しとげたり。われは主の指図通りに舟を造れり。

……主よ、汝はわれらにこの大海を暗やみの中にて渡らせたもうべきか。」(イテル2:18, 22)

主は無限の知識をもっておられるので、その問題に様々な方法で答えることがおできになる。しかし、主の目的は「人に不死不滅と永遠の生命とをもちたらず」(モーセ1:39)ことである。主はこの熱心なしもへの信仰と勤勉さとをさらに伸ばそうと願っておいでであった。そのために、主は問題の直接の解決とはならない事柄を幾つか示して、ジェレドの兄弟の考えを求められた。

「汝らが海の深みに沈める時に光あるため、汝らはわれに何を備えられんことを願うや。」(イテル2:25)

ジェレドの兄弟がその決断を下すのにどれほどの時間をかけ、どのようなことがあったかはわからない。ただ、ジェレドの兄弟はシーレム山に登って行き、岩から16個の小石を溶かし出した。この独創的な方法が主に受け入れられたことは明らかである。主は石に指を触れられた。主が、「これまで汝の如き大いなる信仰をこめてわが前に来りし者なし」(イテル3:9)と言われたのは、この時のことであった。

ジェレドの兄弟が偉大な弟子となったその過程を順に見てみよう。まず第一に、舟の建造に見られるように、言われたことを進んで行なった。第二に、彼はさらに光を求めて主に願い、そのことによって努力し、進歩したいという意気込みを示した。第三に、彼はよく考えた上で、自分の考えを申し出た。

このレベルまで到達している人は、定期的な報告を忘れずに、自分でやって行く用意のできている人である。そのような人は教義と聖約58章に言われている人であり、自分の自由意志で多くのことを行ない、義しいことを選ぶことのできる人である。また、世の創造の時には7時期にわけて1時期が終わるたびに報告が行なわれたが、そのように、報告することは大切なことである。すなわち、次のような過程を踏むことが大切である。

○言われたことを行なう(イテル2:14)

○さらに導きを求め、より良い働きをする(イテル3:18)

○構想を出し、それが承認されたら実行に移す(イテル3:23, 25)

○実行し、報告する(教義と聖約58:27; 72:3)

あなたは指導者に従う者としてどうであろうか。言われたことをするようにいつも指導者から叱咤激励されどおしではないだろうか。最低のことで満足せずに、時々何をすればよいかわかる状態まで進んでいるだろうか。必要とされることを知って提言できるまでになっているだろうか。また、報告しながら自分で実行するまでになっているだろうか。

福音に関することは何でもそうだが、このような段階も順次学んでゆくものである。ところが私たちは時折この順序を前後する。言
われたことをする力がなかったり、尋ねな

ったり、話を聞かなかったり、指導者に受け入れられるような提案があまりできないうちに、自分で事を進めようとする。定期的に報告をしながら行なっていくというのは、指導者の信頼をそれまでの行動によって勝ち得た人にだけできることである。指導者は、信頼できる人に対してのみ大幅な自由を与えるものである。冒頭に述べた宣教師は、これらの特質を欠いていたのである。彼は指示に従わず、まず指導者の信頼を得ようとせずに自分で行動していた。また、報告もしなかった。

アンモンとモーサヤの息子たちのすばらしい話からも、この同じ原則を学ぶことができる。モーサヤの息子たちは改宗して王位を辞退したあと、「野蛮、猛悪、頑固」なレーマン人への伝道を申し出て許された。父のモーサヤは謙遜にへりくだって祈り、息子たちが自分の元に戻って来るという約束を主から受けていたが、息子たちがその祝福を受けるにふさわしいことは、アルマ書17章2節、3節に次のように記されている通りである。

「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。

そればかりでなく、かれらは非常に熱心に祈りと断食をしたから『予言のみたま』と『啓示のみたま』とを受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢によって教えた。」

これは、野蛮猛悪な民に神のみ言葉を伝えたいと思った神の人、モーサヤの息子たちの愛による。彼らが互いに別れたあと、アンモンはラモーナイ王の国に入った。聖典の記録によれば、レーマン人は迷い込んだニーファイ人を捕虜にして王の前に連れ出すならわしで、それから王の気持ちいかんで20節にあるように殺すか、捕虜にしておくか、獄につなぐか、あるいは国外追放にするかが決まるのだった。それまでニーファイ人がやって来てレーマン人を改宗させようと努力したが成功

しなかったわけもそこにあったに違いない。アンモンは捕われて王の前に引き出された時、すぐさま王に福音を説いたり、自分は王や野蛮猛悪で哀れな民を救いにやって来たなどとは言い出さなかった。ただ、その国に滞在させてほしいと願っただけである。「さよう。私はしばらくこの民の中に住みたいと思う。多分私が死ぬまでここに住むかも知れない」（アルマ17：23）これは従来とは全く違った接近法であった。王はそのことに気をよくして、王女を妻にとさえ言い出した。アンモンはそれにさからわず、穏やかに話をえて、「そうではなく、私はただ王の僕になるだけが願いである」（アルマ17：25）と返事した。戦ってまでもべの数をふやそうという土地柄なのに、家来を志願するとは、これも珍しいことであった。アンモンが、しもべになれば最もよくその大国に影響を及ぼせると考えていたことは明らかである。

聖典には、アンモンが3日間王に仕えたあとでセプスの水というところへ行ったと書かれている。そこで彼は、王の羊を追い散らそうとしたある男たちを殺し、ある者たちの腕を切り落とした。王は彼の武勇を聞いて驚いた。しかも、アンモンが自分の手柄話をしようともせず、王の車の用意をしていると聞いてはなおさらであった。

「ラモーナイ王はアンモンが馬と車の用意をしていると言うことを聞いて、いよいよその忠義に驚いて『まことにわが僕たちの中にいまだかつてこの男のように忠実な者はなかった。この男はよくわが命令を記憶してことごとくこれを行う。』』とやった（アルマ18：10）。

アンモンは指導者に従う者として大切な特質を具え、みたまに導かれたこともあって、ラモーナイ王の信頼を得た。王はアンモンを呼び、力の源が何であるか、何がアンモンをそのように非凡にしているのかと尋ねた。ここに、仕えることによって影響を及ぼすアンモンの能力がはっきりとかがえるのである。

「アンモンは賢いけれども悪い心のない人

であったからラモーナイ王に、もし私がどのような能力であるようなことをしたか申し上げたならば、王は私の言葉をお聞きになるか。これが王に私が望むことであると聞いた。

すると王は『よし、われは汝の言うことはみな信ずる』と言った。」(アルマ18:22—23)

こうしてアンモンは真に大きな影響を及ぼすことができるようになった。すなわち、王の信頼を得て、王に助言し、福音の話を告げる機会を得たのである。こうして、ラモーナイ王の宮中の人々や大勢のレーマン人が、アンモンとその兄弟のアロン、それにモーサヤの息子たちの伝道によって改宗したのであった。

あなたは指導者から、もっと自由を得たいと思わないだろうか。従う人に、もっとよく従ってほしいと思わないだろうか。私たちはここで述べた原則を自分に引き比べ、また、ジョセフ・スミスが正しい原則に従って「自分を治める」と言った通りに行なうならば、たとえ完全に同意できなくても、従順に祈りの気持ちをもって指導者に従えるようになる。またこうする時に、指導者は自分の行為の及ぼす影響を知り、従う人たちを信頼し、助言や意見を求めるようになるであろう。

ただし、従うにも限界がある。福音の原則に反したことを求める指導者には従う必要はない。あなたの内には聖霊の力によって正しいこと、正しくないことを識別する能力が具わっている。またあなたは、予言者の声が主の民に語る主の声であることも知っている。総大会でマリオン・G・ロムニー副管長は次のように語った。

「私は大管長の話に非常に感動した。大管長からご自分の体験を聞くことができ幸いである。私は大管長の説教を聞きながら、かれこれ25年も前のひとつの出来事を思い出した。ヒーバー・J・グラント大管長との会話である。そのとき私たちは、公けの立場で取った大管長の行動に対して向けられたある批判について話し合っていた。彼は私の背に腕

をまわし、左肩に手をかけて、こう言った。「マリオン、君はいつも大管長を見つめているね。もし大管長が君に間違ったことをしなさいと言って、君がその通りにしたとしても、主はそのことで君を祝福して下さるよ。」

そしてこう続けた。「でも、心配することはない。主はご自分の代弁者に民を間違って導かせるなどということはなさらないからね。」

私はこの言葉を決して忘れたことがない。また、今までずっとこの勧告を忠実に守ってきたつもりである。」(「大会報告」1972年4月〔英文〕p. 111)

賢明な人は自分の指導者に何をすべきか尋ね、助言や意見に耳を傾け、受け入れる。ジェレドの兄弟はジェレドや主に忠告され、モーサヤの息子たちは父やアルマに忠告され、彼らの意見に従った。

賢明な人は喜んで責任を受け、指導者に受け入れてもらえる提言をする。つまり、指導者に従う人は自分の指導者のやり方をよく知るように努めなければならないということである。自分なりの独創的な方法で指導者の望みを見通し、指導者が必要とする事柄を行なうよう常に努めることである。従う人は自ら行動し、自分の自由意志で多くの正しいことをなし遂げなければならない。そのためには、誤ったことではなく正しいことをなし遂げられるように、まず正しい原則を理解する必要がある。教会の多くの若者たちは指導性を豊かに具えているが、はじめに従順でないために可能性が開花しないことが多い。偉大な指導者ははじめによく従った人である。よく従う者となりなさい。言われることを行ないなさい。何をすればよいか尋ね、助言に耳を傾けなさい。責任を引き受け、提言をし、実行し、自分の自由意志で正しいことをなし遂げなさい。一歩ずつ、走る前にまず歩いて。導く前にまず従いなさい。

☆

☆



.....
 「私たちは彼らを
 愛しました。
 彼らを働かせる力は
 その愛なのです。」



サウニアテュー 世に巣立つ準備

編集主幹
 ブライアン・K・ケリー



「みんなが目的を持ち、仕事に取り組みました。サウニアテュを自立させなくてはならないことを知っていたんです。」これは、長年の間何百人もの人々の生活に劇的な影響を及ぼしてきたある奉仕計画について、信じがたいような話を語ってくれたエド・カマウオハ兄弟の言葉である。

サウニアテュの村は、西サモアのウボル島にあるアピアから30キロほど東の死火山の火口原にある。ウボル島の道路はほとんどが海岸と並行して走り、内陸へ向かう道はほとんどない。サウニアテュが海岸道路からわずか6キロの距離でありながら孤立しているのは、そのためである。道の両側をうっそうと木々がおおう様はまるで巨大な緑のトンネルのようで、でこぼこの曲りくねった火山道を走る車は徒歩と大して変わらない速さである。

サモア語のサウニアテュは、「備えの場所」という意味である。サウニアテュの村を開いた昔の聖徒たちは、教会のサモア史にこの場所が重要な位置を占めることを見通していた。彼らは、力を蓄え準備をすることのできる場所が必要なことを知っていたのである。1904年に彼らがサウニアテュの村を築いたのは、モルモンというだけで不当な税金を課せられ、迫害され、村々を追われたからであった。その後聖徒たちはサウニアテュに学校を建てたが、それはサモアの教会学校のひとつとなった。続く数年間、村民と学校の管理者たちとの間でそのようなへき地の学校運営の当否について度々話し合いがもたれた。

1921年、サモアの役人が村の存続に驚きの目をみはった頃、デビッド・O・マッケイ長老とヒュー・キャノン長老が全世界の教会の視察の途中、サモアに立ち寄った。マッケイ長老が使徒としてサウニアテュ村と村民に祝福を宣言したのはこの時のことである。特にマッケイ長老は、村民が豊かな食物と衣服に恵まれ、農園の収穫が増し、村民の心と家庭に平和が宿するようにと祝福した。

1967年12月に、エド・カマウオハ兄弟がサ

ウニアテュ校の新校長に任命された。それまで続いてきたサウニアテュ校が廃校の危機に直面していた、そのような時に着任したのであった。

「学校の質と存在意義について、行政的に深刻な問題が起っていました」と、カマウオハ兄弟は語る。サモア人は高等学校卒業時に国の標準テストを受けることになっているが、サウニアテュ卒業生の平均点数はサモアの他の教会学校より5点も低かったのである。学力が劣る上に、学校の維持費が高かった。かといって、貧困家庭の子女が多いため、学費の値上げは望めなかった。また、生徒や教師の熱意も低かった。

カマウオハ兄弟はこう語る。「学校是最悪の状態だと思いました。私は管理する立場にある者としてこれらの問題に気づいていましたが、同時にサウニアテュの伝統がサモアの聖徒たちにとってどんなに大切かということも承知していたつもりです。1921年のマッケイ大管長の祝福は、私たちがふさわしい生活をしなければ得られないことも知っていました。」

エド・カマウオハは、まだ成就されていないが村民がその気になれば予言された通りの将来が必ず来る、と信じていた。そこで彼は、休む暇もなく、ポリネシア人らしいひきしまった体に闘志を込めて、サウニアテュの生徒たちに自立と誇りを持たせ、村民が約束された祝福をその手で刈り取ることができるように、いろいろな計画を立て始めたのである。

サウニアテュの再起を目指す彼の構想は遠大であった。しかし大勢の人々は、ひと握りの教師たちと数十人の子供たちの手に負えるはずはないと考えた。けれども、カマウオハ兄弟はそれができると感じていた。

「みんなを一大事業に参加させることは、大きな機械を始動するのと似ています。ただ放ってはいけません。一気に回転を上げて、それは持続させるのです。」カマウオハ兄弟は語る。

自分たちの将来は自分自身が左右するとい

うことを知れば、学校での生徒の態度も教師たちの心構えも違ってくるはずであるというのが彼の考えであった。「それまで人々は、だれかがサウニアテュの私たちを助けてくれると、受け身の体勢でいたのです。私は人々に、外部の援助に頼り、人をあてにしすぎていることを認識させようと努めました。さらに頭脳と両手を主からいただいても、自分でそれを使わなければ主は助けて下さらないことを説明しました。こうして私たちは自分たちの手で道路の建設に着手しました。」

道路ができあがると、サウニアテュの若者たちは間を置かずに別の仕事に着手した。それぞれグループに分かれて崖に沿って水泳場を下る小道や道路、自然道、農園の整備、マッケイ大管長の祝福を記念する村長の家を含む、サモアの村作りに励んだのである。火口の絶壁から水泳場や美しい滝へ下りて行くコンクリートの階段造りは1年がかりであった。この仕事に従事したのは4人の少年である。彼らは2本のつるはしと2本のかなてこと1個のハンマーを使い、6ヵ月間、土曜日と放課後に暗くなるまで働いた。少しずつ石を削って、滝壺付近まで、通路を造ったのである。あとの半年は骨の折れる階段造りの仕事であった。4人は間に合わせの古いトロッコで浜辺から砂を運び、川から砂利を手に入れてきて、それにセメントを加え、大岩を浅くえぐった穴の中で手でそれらを混ぜ合わせた。そして、できたコンクリートはシャベルでバケツに入れ、長い竹の両端にロープでそのバケツを結わえて肩にかけて運び、崖下まで下ろした。このようにして一度に一段ずつ造り、ついに道が完成した。

滝に下りる道が造られている間に、少女たちには村から滝に通じる道路造りの仕事が与えられた。少女たちは道路計画を練ったが、最初の案は不適当と思われた。そこでカマウオハ兄弟は、別の案を練るように指図した。しかし、その案も適当でなかった。少女たちから報告を受けた彼は、それが適当でない理

由はまだ真剣に考えていないからだと言った。

「3度目には精一杯考えて、完全な案ができました。ほどよくカーブして、湿地帯を避け、理想的な道ができました」と彼は言う。

少女たちは毎日学校が終わってから、川の小石をバケツに入れて運び、道に敷いた。ひとりあたり25杯から40杯の小石を毎日運び、わずかに数ヵ月で道路ができ上がった。

それから少年少女たちは、山から若木を掘ってきて、道路際に移植した。ランやシダなども植えて道を飾った。彼らはその道をロサレーン（バラの道）と名づけた。

また、別の生徒たちは放課後と土曜日を使って、学校農園を拡張した。22,000本のタロイモと4,000本のバナナの木、それにパイナップルやココナツの木もたくさん植えた。

自然道を受け持った青年たちは、木や下草などを刈って、歩く人が観葉植物を觀賞できるようにした。そしてこの仕事からデザインの基本を学んだ。自然道のグループは、初めて眼前にたちはだかる厚い緑の壁を見た時、カマウオハ兄弟のところへ引き返してきて、どこを刈ってどこを残したらよいかわからないと言った。

「それは君たちの責任だから私は考えてあげないよと言ったんです。そして、彼らに『自分のファレ（サモアの家屋）にいてパウレ（すだれ）が下がっている時に、外を見たいと思ったら君たち、どうする？』と尋ねました。すると、生徒たちは『パウレをどけて外を見ます』と返事しました。この原則を学んでから、彼らは不要な木や下草を刈って、植物の觀賞や散歩のいわば天然ののぞき窓をきれいに作り上げました。」

仕事ははかどり、1921年のマッケイ大管長の来訪とその時にサウニアテュについて使徒が語った祝福を記念する、サモアのモデル村の建設にまで計画は及んだ。彼らは特別な村長の家を造り、それをマッケイハウスと呼んだ。マッケイハウスの完成後、何か飾りがほしいと考えた青年たちは、森へ行ってチーク

の木を切った。チークの木を集めるのは大仕事だった。森の中で良い木を見つけてそれを切り倒し、それから1本ずつ枝葉を刈り落とし、ウインチで巻き上げてトレーラーに積み、製材所まで運んだ。こうして準備した角材を土地の職人の所に持って行ってサモアの昔物語を彫刻してもらった。しかし、木の入手から完成まで何カ月もかかった。彫刻の費用は初めのうち、サウニアテュの宣教師や村民の意気に感銘を受けた人々からの寄付でまかなったが、その寄付も足らず、20本の大半が青年たちの働いて得たお金で支払われた。彼らはある種の水草を湿地帯へ移植して牧草とし、牧草地を自分たちの手でだんだんと拡張して、その見返りに家畜をもらいうけ、それを売って彫刻の代金にしたのである。

木彫りの計画が完了すると、カマウオハ兄弟は職人にマッケイ大管長の胸像を依頼した。彼はマッケイ大管長の晩年の写真を全部集めて彼に渡した。やがてカマウオハ兄弟ができた胸像を受け取りに行くと、木彫り職人はももんとした様子で次のように語った。

「実は思い通りに彫れなかったんです。こんな経験は生まれて初めてですよ。いつもだったらどうにかなるのに、どうしたわけか、この人のについては思い通りに手が動かないんでね。ほら、見ての通り、あなたからもらった写真にちっとも似てない。」

カマウオハ兄弟はその晩彫像をサウニアテュに持ち帰った。「太陽が沈みかけていたので、急いでマッケイハウスに行って、用意しておいた台座に胸像を据えました。そしてサウニアテュの古老がいたので、マッケイ大管長の胸像だがどうですかと尋ねたのです。私は後に立ってそれを見ていました。古老は返事をしませんでした。それで私は前にまわって、『どこが悪いのでしょうか。お気に召しませんか』と言って、彼を見ると、古老は涙を流していたのです。彼はこう言いました。『私はマッケイ長老が祝福を下さった時に、その場にいたんじゃないよ。これは、1921年に長老がこ

こに來られた時のお顔じゃ』と。」

「また別の折に、木彫り職人が、彼はモルモンではなかったんですが、『エド、大まじめな話だが、この彫刻は私がした仕事じゃない。あなたがしたんでもない。これは主のなさった仕事ですよ』と言うんです。」

ほかにもいろいろな事柄に対して、みたまの導きがあった。その一例が、苦勞して植えたタロイモをだれかに盗まれた時のことである。サウニアテュの村民はだれもそのことを知らないと言うので、カマウオハ兄弟は非常に困ってしまった。その晩、彼は問題をどう解決したらよいか主に祈った。彼の祈りは夢で答えられた。夢の中でふたりの村人が農園からタロイモを盗み出していた。ふたりがタロイモを掘り起こして、葉を切り落とし、落とした葉っぱを土の中に埋めたのを見た。彼らがタロイモを隠しておいて、真夜中に掘り出しに来るはずの場所も夢に見た。その翌朝になって、カマウオハ兄弟はふたりの男を事務室に呼び、どうしてタロイモを盗んだのかと聞いた。彼らはけんか腰になって、「何が証拠でわしらをどろぼう扱いするんです」と言った。

カマウオハ兄弟はそれに対して、「主が夢で教えて下さったから、あなたが盗んだことを知っています」と答えた。そして、タロイモを掘り起こしてから埋めるまで、夢の中のふたりがしたことを話して聞かせた。「彼らは泣いて後悔しました。嘘をつくことについて、大きな教訓を学んだと思います。人に嘘はつけても、神はだましません。」

「たくさんの経験をしました。不可能を可能にする助けを主が与えて下さることを、その経験から知りました。このようにして働けば、みたまの大切なことがよくわかります。」

「ある作業グループを組織した時のことです。マッケイハウスの屋根を造るのに、セネット（ココナツの殻で作るロープ）が非常にたくさん必要でした。大勢の人がロープを提供すると言ってくれましたが、もらいに行く

と、だれも用意していないのです。島中を駆けまわっても、集まったのはわずかでした。実にはがっかりしました。それで神様に愚痴をこぼしたんです。『私たちは一生懸命働いています。それなのに、必要な援助がありません』と。

私はほかの約束があって、伝道本部にいました。するとひとりの長老が、『カマウオハ兄弟、持ち合わせのセネットがあるのでよかったらどうぞ』と言ってくれたのです。

『ああ、よかった』と思いました。でも、長老ひとりがおみやげにするセネットだけではとても役に立たないだろうと思いました。そうする間に、彼は自分の部屋に行ってセネットをかかえてきました。ところが何と、合衆国に帰ったらこれでサモアのファレ(住居)を建てるつもりでしたということで、私たちがちょうど必要としていた長さがあったではありませんか。

気持ちはおわかりでしょう。私は急いで帰って主に祈り、愚痴をこぼしたことをわびました。落胆したことを本当に申し訳ないと思いました。』

いろいろな計画で2年を過ごしたところで、カマウオハ兄弟は、すべての仕事が完成しないうちはまだ終りでないことを人々がよく知るようになったと報告している。道路も橋も滝への階段も完成して、残るは上水道の整備であった。村人は泉から水道管で水を引きたいという希望だったが、管を購入するお金がないので、数年前に使った古い管を掘り返してそれを川できれいに洗った。まだ使えるものにペンキを塗ると、泉から村までちょうどまっすぐにつながる長さになった。しかし、途中は20メートルの長さにわたって火山岩の岩床にあたっていた。

「みんなに言いました。『まっすぐなら水道管が引けます。もし水が欲しければ、本当に水が欲しければ、泉までこの岩床を掘り抜かなければなりません。』すると、どの仕事でも人並以上に働いたファレオウ・イトビという

名の兄弟が、『ああ、これまでもできたんだ。こんな岩床なんぞ、なんのことはない』と言いました。』

「私たちはランプの光の下で夜中まで働きました。ファレオウは両手に血をにじませながら、生徒の手本になって仕事を教えました。彼はどの仕事でもそうでした。道路を造る時も、一生懸命でした。働いている時が最高の気分だと言って、休憩もしませんでした。』

サウニアテュの若者は、エド・カマウオハやファレオウ・イトビのような指導者たちから、たとえ貧しくても、またある時は人々に嘲笑されても、自分たちは主にとって大切であり、主は自分たちが「ナンバーワン」になるように助けて下さるということを考えていたのである。彼らはサウニアテュ村でのことで、どこへ行っても、その勤勉さと努力を高く買われ評判であった。

サウニアテュで働いた若者の大半は伝道に出た。ポウオノ・ラメカ長老は現在、西サモアで伝道中である。彼はサウニアテュに3年在学して、学業のかたわら農場と滝で働いた。サウニアテュでの体験を語る時、彼の目は光り、顔は輝く。

ラメカ長老はこのように語った。「私はサウニアテュで成長しました。カマウオハ兄弟の励ましをいただいて、私は進歩しましたし、高校を卒業できました。カマウオハ兄弟は私の教師でしたが、今は友だちです。』

ほとんどの生徒が、いかに働くべきかを知ったことを感謝し、その体験からどんな問題にも正面から取り組む姿勢を学んだと感じている。マティ・ファイファテュはこう語った。

「エドは仕事の方法を教えてください、実行することは私にまかせました。』

事業が完了する頃には、サウニアテュの生徒の学業成績は向上していた。生徒たちは自立心と誇りを持つようになり、3年間で標準テストの成績が全教会学校の最下位から最上位に躍進した。

アーホウ夫妻は、サウニアテュの教師時代

に職場でめぐりあった。彼らは結婚後ブリガム・ヤング大学のハワイ校へ行ってさらに勉強することに決めた。アタリナは、青年たちがいろいろな計画の下で働く姿を見て、良い母親とは何か、子供の教育とは何かについて得るものがあつたと語っている。

「それに、仕事が終わったら、それを検討してみることが必要なことも知りました。出来ればえが良くなければ、それをやり直さなくてははいけませんから。」

夫のポアオはリーダーシップについて学んだと語った。不可能を可能にする方法を学んだので、もっと勉強して立派な教師になるつもりであると話してくれた。「仕事がとてもきつい時には、冗談を飛ばして笑顔になれば、容易に思えてくるものです」と言うポアオである。

ポアオとアタリナはあまり学費がなかったために大学では苦学した。「私たちはサウニアテュにいた時に犠牲について学び、それが私たちにとって祝福となっています。洗濯のお金が必要になると、神殿の前の池へ行ったものです。コインランドリーでの洗濯に使う25セントがない時には、池に行けばいつでもお金がありました。25セント以上入っていた時もありました。いつも必要な分はありました。しかし、家計が苦しくない時は、池にお金が入っていないんです。あれは主の祝福だと思います。」ポアオはこう語る。

フォラウ・ネリア兄弟とレウテ姉妹は、主のみ手をそこに見て、サウニアテュを祝福の地と考えている。彼らはいろいろな計画が実施されていた時の寄宿舎の管理人で、ネリア姉妹は少女たちと一緒に道路建設に従事した。

ネリア兄弟は、サウニアテュについてこう述べている。「私はあそこが大好きです。1942年に妻に出会ったのもあそこでした。初代の教師たちから私自身教育を受けましたし。主のみ業の大切さを学んだのもあの村でした。

私たちが自分の手をもって村を築き、美し

くしたので、主がそれに報いて祝福を下されたのです。タロイモ、バナナ、それこそなんでも、あの村はサモアで一番収穫が多い所です。

私たちは協力することを学び、働くことのすばらしさを互いに教え合いました。私は監督でしたが、どのようにして働けばよいかを教えて、率先して働き始めれば、みんなもすぐについてくることがわかりました。」

サウニアテュの精神は、その地を訪れるすべての人に影響を及ぼすようである。学校運営に携わるイサマエリ兄弟は、最初はサウニアテュに来たくなかったが、と言いながらこう続けた。「しかし、サウニアテュでしばらく過ごす内に、自分の家族に主のみたまを感じるようになりました。それはここにいることが祝福であるということを知りました。家族が病気の時は祝福を施すとよくなります。ここに来る前は夫婦でよく口げんかをしたもので、堪忍袋の緒を切らすこともありましたが、ありがたいことに今は実に仲良くやっています。

町や大きな村から遠いということもよいことですよ。静かだし、酔っ払いはいないし、どろぼうも、問題を起こす人たちもいない。」

今、ロサレーンは、「地上で最も美しい地」とマッケイ大管長がサウニアテュを評したその言葉通りである。ヤシやランの葉陰を歩く若者たちは美しい。彼らは主を愛し、勤勉に働いて自己を向上させ、福音に生きている。毎年何人かが社会に出るが、彼らはサウニアテュの教えを身につけて巣立って行く。そのサウニアテュで学ぶ教訓には、ひとつの大きな指導の原則が根を下ろしている。ネリア兄弟はこう語るのである。「私たちは彼らを愛しました。彼らを働かせる力はその愛なのです。」

☆

☆

日本系図探求の概要

グレッグ・ガブラー

系図とは

両親、祖父母、その他の直系の先祖、ならびにその子孫を調査すること、言い換えれば、親族とその血統を調べることである。

系図探求におけるあなたの責任

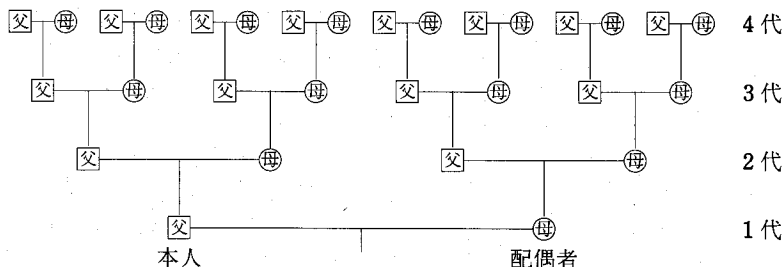
先祖の家族の系図を探索し、彼らのために神殿の儀式が行なえるようにする責任がある。また、自分と家族の歴史を「覚えの書」に記

録する責任を負っている。

どこから開始するか

自分自身から始める。自分が結婚していれば、妻子にまで範囲を広げる。「家族のための神殿の儀式」〔PBGS 072 AJA〕参照）まず教会の指導者の勧めに従い、4代家族の記録プログラムを完成する。次にあなたの家系の中で死亡した人を順次取りあげる。

4代家族の記録プログラム



どのように探索を進めるか

一歩ずつ段階を追って進む。ジョセフ・スミスはこう言っている。「はしごを登る時は、一番下から始めて、一段一段登って行かなければならない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.348）次のような過程を踏んで繰り返せば、成果が得られるであろう。

1. 目標を設定する
2. 何の資料を用いるかを定める
3. 資料の出所を調べる
4. 資料を調査する
5. わかったことを記録する
6. 判明した内容を評価する
7. 判明した内容を活用する

神殿の儀式を施すために必要な事項

次の事項について知るように努力を払う。

1. 氏名
2. 出生年月日

3. 死亡年月日

4. 結婚年月日と場所（結び固めのために）

5. 続柄

上記の全項目について正確な情報は入手できないかもしれない。しかし少なくともその人が他の人と混同される恐れがない程度の情報がなければならない。従って特別な状況の下では、日付を概算してもよい。また、先祖の身元を確認できる情報があれば、妻の名前が入手できなくてもよいし、地名がはっきりしなくてもよい。先祖が110年以前に生まれた場合は、死亡年月日が入手できなくても、その人のために神殿の儀式を行なうことができる。提出の規準については、「系図記録提出の手引き」（p.38）を参照。不明な点があれば、ワード部／支部の系図役員、またはステーキ部／地方部の系図・神殿活動担当アドバイザーに尋ねるとよい。

系図協会には何を提出するか

4代プログラムの家族の記録（記録保管所用）

儀式を望む家族毎に1枚の家族の記録（2度以上結婚した祖先がいれば、結婚1件毎に提出する。）

提出するすべての世代を網羅する系図表
注意：自分が提出する記録の控えを取っておく。

家にある資料を入手する

自分の家と父母兄弟姉妹の家で入手できる資料をすべて集める。先祖代々継承している家には、資料がたくさん残っているものである。また、親戚の家に資料がないかどうか、情報がないかどうか必ず尋ねる。そして、できるかぎりこれらの資料をコピーするか、メモをとる。

自分の家にある資料の価値に気づいていない人が案外多い。次にあげるような資料が入手できるであろう。

自分の戸籍

古い家族の戸籍

仏壇にある過去帳と位牌

神棚にある資料

教会の証明書や記録

家族史

家系図

手紙

家族について書いた出版物

記念品

卒業証書、成績表など

日記、伝記、賓客名簿など

証明書、申込み書

地図、図面、証文、遺言書

新聞の切抜き

写真

火葬の記録、住民登録、兵役の記録

領収書、会計簿等

個人のノートや記録

家で入手できた上記の資料を分析し、あなたの個人の記録と家族の記録にまとめる。資料を年代順に並べると便利である。これらの資料を活用することによって、また記憶をたどったり、あなたの生涯や家族または先祖のことを思い出せる友人、親戚に質問することによって、あなたの個人の歴史と家族の歴史を再構成して覚えの書を作成することができる。

あなたが書く記録の内容は、最終的には現段階および後の段階における探求によって明らかにされる事実左右される。従って、個別の問題について探偵が臨むような態度で、できるだけ完全を目指すように努める。あなたの記録が歴史的な体裁を見せ始めるまで、何回か下書きをし直さなければならないであろう。そして、個人、家族、祖先について多くの情報を入手するにつれて、記録は徐々に完全な姿を取ってくるであろう。

完全を目指す

あなたが再構成している歴史には当然欠落している部分や不十分なところがあるであろう。記録を完成させ、すでに入手している情報を確認するのに必要な情報の多くは、文通や口頭の会見によって得ることができる。探求の成果をあげる鍵は、適格な人または情報源を知ることである。出所はすべて吟味する必要があるということを忘れてはならない。文書による情報源も口頭による情報源も、その情報が残された動機、状況、および正当性を考えなければならない。

書くということは骨組だけの概要に肉づけをするということである。興味を引く読みやすい文体で書く。一貫した明快な文を目指す。十分に調べ上げ、推敲してできあがった作品はそれ自体満足すべき報いである。特にあなたの子孫にとってその価値は極めて大きい。

家族や祖先について調査が進めば、順次系図表と家族の記録に氏名と必要な項目を記入していく。

家族や先祖について得た情報をまとめ編集

歴史の再構成

するため、系統的にノートをとる必要がある。ノートのとり方を上手にすれば、何が終わっていて、何がまだであるかが一目瞭然となる。効率のかつわかりやすく、しかも十分目的を達せられれば、どんな方法でもよい。

戸籍

家で得られた資料を集め、分析し、活用した後、今度はさらにむずかしい探求に取り組む。次の段階は公的な機関が発行している記録をすべて入手することである。その中で最も重要なものは戸籍である。この記録を入手するには計画が必要である。戸籍または除籍謄本を注文する時には、どんな記録が必要かをはっきり指定しなければならない。求める人の本籍とその本籍を管轄する役所を知ることでもある。本籍地の近くに住んでいる場合は、自分で直接謄本を入手することができる。閲覧は許されなくなっているの、前もってどの謄本を手に入れたいかを決めておかなければならない。郵便で取り寄せる時は、手数料と郵便代を正確に計算しなければならない。また本籍地と現住所が異なることが多いことも覚えておかなければならない。

今日の戸籍制度は1872年に始まったが、初期の記録は入手できない。保存に期限があることと最近行なわれた戸籍法改訂のため、入手できる範囲は狭まっている。しかし、記録自体は制約されていても、記載事項の証明が得られる場合もある。

一般に、個人の一生は出生から死亡に至るまで戸籍の記載を追っていけばたどることができる。この戸籍の記載は法律で定められた形式に従っている。日本では、出来事とその年月日は届出によって戸籍に記入されるようになっている。戸籍は日本の家族の公的な完全な記録である。従って戸籍は日本における探求の最も重要な資料である。この資料を入手し、これから情報をどのように得るか、その能力いかんで4大家族の記録プログラムの成功の度合が決まる。

注意：日本の伝統では男子が家を相続する。その理由で頻繁に養子縁組が行なわれたため、血縁と家系が一致しないことがある。探求に当たっては特に続き柄に気をつけ、いろいろな変化に注目しなければならない。

戸籍の各欄には次の情報が記載される。(戸籍のいろいろな種類と記載事項の詳細については「日本の戸籍」シリーズJ, No.5 参照)

本籍地	戸籍筆頭者または前戸主	
本籍地が変わった場合、戸籍を設けた理由と年月日。変わった理由と前の本籍地。		
この戸籍に記載する理由。出生年月日、出生地、届出年月日、届出人と記載された者との関係、結婚届出の受付年月日、配偶者の氏名。記載の理由。前の本籍地等。養子であれば養父母の氏名と続柄。その他法律が定める事柄。	父の氏名	性別と続柄
	母の氏名	
	夫または戸籍筆頭者の氏名	
	上記の者の出生年月日	

公的な機関が発行するその他の価値ある記録

公的な機関が発行するその他の記録で探求に役立つものとしては、次のようなものがある。

住民票 (1941年以降)

寄留簿 (戦争前)

火葬、埋葬の証明書

陸軍留守部隊名簿 (厚生省)

海軍将兵履歴書 (厚生省)

恩給受領者 (厚生省)

復員乗船者名簿 (厚生省)

キリスト教会名簿 (各教会)

身分登記簿 (1898-1914年) (現在公開されていない)

国勢調査 (非公開)

殉国者名簿 (靖国神社)

納税及び土地所有の記録 (登記所) (家族だけが閲覧できる)

家屋及び不動産の記録（登記所）（関係者だけが閲覧できる）

新聞、等。

詳しくは、「日本の主な系図資料」シリーズJ, No.1を参照していただきたい。

仏教徒死亡記録

まず、先祖が代々世話になった寺を調べる。寺の資料は家系を確立するために書かれたものではなく、弔いのために書かれたものである。普通極めて信頼できるものである。このような記録を偽造する理由は全くないからである。寺の僧侶は死んだ人の名前を過去帳（法名帳とか霊簿と呼ばれることもある）に記入し、それを安全な所に保管している。この記録は代々受け継がれ、寺の貴重な宝と考えられてきた。もともと過去帳とは仏教徒の死亡者名簿であって、記入のした僧とその宗派の押印が入っている。過去帳は日本における系図探求の障害を打ち破る大きな助けとなる資料である。

過去帳にはいろいろな様式がある。ほとんどどの寺でも、寺の建立を起点として死亡者名を古い順に記録している。普通僧侶はこの記録をもとにして、月または日別に死亡者一覧表を作り、記念行事の索引とする。寺によっては家毎に過去帳が作成されていることもある。

過去帳にも多少の相違があるが、大体の宗派が一般的な原則に従っている。死後につけられた戒名または法名が記入され、まずこれが私たちの目にとまる。性別、社会的な地位、死亡時の大体の年齢、人柄、あるいは悲劇的な死に方をした場合そのことを示唆する説明が、その名前に、あるいは戒名の称号やその末尾に記載されている。また、死亡年月日が記載されている。中には俗名、死亡時の年齢、続柄、死者の性別が記載されている詳しい過去帳もある。

どんな様式の過去帳であろうとそこから得られるすべての手がかり、たとえば称号、地

名、死亡時の年齢、続柄が記録されていればそれらの項目に注目する。

続柄や名前についてわからないことがあれば住職に尋ねるとよい。記載事項が判読できさえすれば、説明してもらえらるであろう。完全な探求をするには、時間をかける必要がある。

位牌

位牌とは死者の名号を書いて祭る長方形のふだのことであり、普通木製でニスや塗料で仕上げられている。同様の位牌が家庭の仏壇にも置かれている。

位牌は他の資料の信ぴょう性を高めたり、欠けた情報を補うのに活用することができる。死後に与えられた名前が表に書かれている。裏面には普通その人の生前の氏名が書かれており、まれにどのような人生を送ったかが短く書かれていることもある。また、死亡年月日と死亡時の年齢が表か裏に記されている。

墓

先祖の墓も重要であって、ここを訪問すべきである。墓石に刻んである文字を調べる。ここに書かれた氏名や年月日と位牌や過去帳で得られた情報とを比較する。墓石には普通戒名、俗名、死亡年月日、家紋が刻まれている。古いものは風化して読みにくいことがよくあるが、場合によっては拓本が役立つ。

系図探求に価値があると思われる他の情報源

寺で得られるもの…鐘に刻んである文字。末寺人別帳、人別帳、宗旨手形、奉加帳等の文書

神社で得られるもの…氏名名簿、神社明細帳、奉加帳等

発祥地

あなたの家族の歴史は、先祖が代々住んできた村または町の歴史と切り離すことができない。言い換えれば、郡や県の一部なのであ

る。従って、先祖が出た発祥地の歴史を学ぶようにする。ほとんどの姓は先祖が長い間住んだ所で始まっている。徹底的に調べれば、たいいていの場合そこに共通の先祖がいたことがわかる。

各地の歴史を調べるには、まず昔の名前と管轄区域を知らなければならない。このためには分冊で何巻も出ている地名辞典、例えば吉田東伍著「大日本地名辞典」等が役に立つ。先祖が出た村や町の古い地図や歴史の研究書を調べる。このような資料は普通先祖のいた家の近くの図書館や県立図書館に行けば得られる。これを調べれば系図の面で重要な情報を発見することができる。それだけでなく、このことによって得られる知識によって先祖に対する理解を深め、家族の歴史を豊かなものにすることができる。

古い歴史資料に親戚の名前が出ているだろうか

明治以前の資料を研究するには、古い史料の研究法と古文書学の相当な素養が要求される。資料は分散していて、整理されていないことがある。また、まだ目録に載っていないものも多い。先祖の出身地の図書館か、県立図書館の目録に目を通し、自分の祖先の資料がないかどうかを確かめる。個人の蔵書や大学の図書館に収められている資料もある。このような資料を手に入れるには、交渉する必要がある。

あなたが求める資料は、大体において探求している個人または家族がどんな階層の出身であるかによって分類される。例えば、大名の家族は貴族と同じように特別な系図記録を持っていた。士族の系図を調べる場合は、次のような資料を参照すればよい。

藩士族名簿、奉公帳、分限帳、侍家譜、侍帳、等。

農民出身であれば、上記より詳細ではないが、次のような資料を調べればよい。

宗門改帳、人別帳、検地帳、水帳、分限帳、

五人組帳、等。

商人や工人の子孫であれば、財政関係の記録、人別帳、町民簿、宗門改帳等を参照するとよい。

ほかにも数多くの資料がある。適切な資料を捜し当てることができれば、探求を大幅に進めることができる。従って調査を進めるに当たってあきらめてはならない。

偽りの系図に気をつける

探求していくうちに、家系の中で何代も祖先の世代を書き連ねた見事な系図を発見することがある。徳川時代に家族の地位を高めるため「立派な系図」を系図専門家に書かせることがよく行なわれた。貴族や皇族に連なる家史や家譜、あるいは本家であることを主張したものは特に疑わしい。研究の結果、このような系図には作りごとがたくさん入っていることが判明している。偽作の系図は一般にさかのぼればさかのぼるほど入り組んでいる。このような偽系図と学者が呼んでいる外観の整った系図は、批判的な視点で見、できるだけ信ぴょう性を確かめていかなければならない。

終りに

戸籍だけで、4代家族の記録プログラムを完成することができるかもしれない。しかしあなたの責任はそこで終わるわけではない。便利な（扱いやすい）戸籍の入手には限界があるので、系図をさかのぼっていくには、寺の資料や古文書などもっとむずかしい資料を利用する必要がある。よく準備すれば、この転換も比較的楽にできるようになる。

系図は一生かかって進める作業である。毎日何分か研究し、1週間に何時間か探求する人こそが系図探求に通じるのである。探求の成果をあげるには絶えず計画し、調査能力を増していく必要がある。系図探求は継続して行なうものであり、報いの伴う作業である。

安全な道

十二使徒評議員会会員
ボイト・K・バックナー



ま れにみる高潔さと知恵を具えたひとりの偉大なドイツ人の教会員にまつわる出来事について、少しご紹介したいと思う。カール・G・メーザー博士と言い、偉大な教育者で、ブリガム・ヤング大学を創設した人である。

メーザー兄弟は、信望の篤い人であったが、同時に非常に謙遜な人でもあった。彼の態度は、神権者として本来あるべき姿を映し出しているように思える。

ある時、メーザー兄弟は若い宣教師の団を率いて高い峰を越えようとしていた。その時、杭が点々と山の上まで、雪の表面から少し頭をのぞかせて続いている光景が、彼の目に入った。それは険しい山道を進む人に安全な道を示すためのものだった。

頂上にたどりついた時、メーザー兄弟は宣教師たちにひとつの教訓を与えたいと思った。彼は頂きに立つと、一行が従ってきた杭を指してこう言った。「兄弟たち、ここに神権が立っている。ここにあるのはただの杭だ。だが、今この場にこうして立っているから価値がある。なぜならこの杭の示す道から離れたら、私たちは遭難してしまうのだから。」教会にあって同じことが言える。教会幹部は指導者としてそれぞれの職に召され、それに伴う神権の権能を授けられている。一人一人はただの杭であるが、その職に召されているので重要である。いつかその職を解かれることもあろう。しかし、召されている間はその職を果たすのである。

さて、ワード部や支部、ステーク部にあって、主はしかるべき兄弟たちを指導者として召しておられる。だれひとりとして完全な人はいないが、彼らはその職に召されているのである。従って、私たちは彼らに従わなければならない。

この教会は啓示によって導かれている。啓示は、管理役員に与えられる。従って私は、管理役員が提案する事柄に決して反対はしない。私はいつもそのように気をつけてきた。彼はただの杭であるかもしれない。しかし、その職に召されているのである。

願わくは神権者すべてが私たちの管理者として召されている人々を支持し、彼らに従うように。神は生きておられ、イエスはキリストである。スペンサー・W・キンボール大管長はこの地上における主の正当な代理人である。イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

第 二次世界大戦のすぐあとでワシントンD.

C.へ行った時、たまたま読んだニューヨーク新聞に、1年間合衆国に滞在して間もなく帰国するというある史学者の話が載っていた。彼の名前は忘れてしまったが、話の中のひとつの質問は今でも覚えている。記者は、「1年間アメリカに滞在して歴史と国民について研究なさったわけですが、あなたがアメリカの全国民の中で最も偉大だとお考えの人はだれですか」と質問した。

するとその史学者は、「たったひとり偉大なアメリカ人がいます。モルモンの予言者、ジョセフ・スミスです」と答えた。

彼はそのわけを、「人の生き方を説き、すべての社会を変えることが可能な思想を提唱したたったひとりのアメリカ人です」と説明した。

予言者ジョセフ・スミスの説いた教えと生き方を深く研究すると、それに従いさえすれば人類の歴史をも左右できる革命的な思想が豊かに見いだされる。

ジョセフ・スミスの見解が当時の社会とどれだけ相違していたのかを、私たちは認識していない。

彼は神に対する新しい見方（それを回復と呼んでもさしつかえないと思うが）、当時の常識とは異なる見方を主張した。御父は感情、感覚、体を持ちたもう御方、すなわち人に語りかけ、祈りを聞き、祈りに答えたもう御方であると主張したのである。

またジョセフ・スミスは、イエス・キリストが神の御子であり、復活された御方であって、私たちの時代に姿を示されたばかりでなく、ご自分の教会を再び建てて今も教会を導いておられるという新しい証拠を示した。

彼は人を文字通り神の子供とみなし、この世に生まれる前に生命を持ち、死後も再び生き続け神となる可能性を宿す存在であると高く評価した。人間は神と同族であると彼は告げた。

また彼は、地球の創造された目的は人に永

遠の生命をもたらすこと、またこの人生の目的は幸福を得ることであると述べた。

彼は、救いは万人に及び、全人類は死から復活して、悔い改めれば罪を赦されると教えた。

また、すでにこの世を去った大勢の人々もイエス・キリストの福音を聞く機会にあずかり、福音を受け入れるならば救いに必要なすべての儀式がこの世で代理によって執行されると宣言した。

ほかにも彼は数限りない画期的な思想を説いている。これらは私たちが今なお世に主張している思想であり、全人類の信仰を変革できる思想である。

指導者の5つの特質

ジョセフ・スミスは神のしもべとして働くために必要とされる特質を幾つか具えていたが、私たちもそれらを具えれば神のためによい働きをすることができる。偉大さは努力なしで人に具わるものではないし、指導者の特質を持たずに神のみ手に使われる人はひとりもないのである。

知性

第一の特質は知性である。予言者ジョセフ・スミスは正式な学校教育を受ける機会がなかったが、あらゆる事柄に関心を抱いていた。例えば1836年には教会が所在していたオハイオ州カートランドの町にヘブライ語学者のセイヤス教授を招くのに尽力した。それは、教会の指導者はヘブライ語に通じておくべきだと考えたからである。しかし、週にたかだか2、3夜、期間にして3ヵ月間学んだところで、どれだけヘブライ語がわかるだろうか。にもかかわらず、ジョセフ・スミスとオルソン・ブラットのふたりはその後ヘブライ語を不自由なく読めるようになった。その上予言者は、人々を前にしてヘブライ語の原典から聖書の各箇所を論じることができたのであった。



ジョセフ・スミス——
指導者の5つの特質

ウィリアム・E・ベレット

私たちは人の知性を、その人が生前に語った見解が後半にどれだけ批判に耐え得るかで評価することがよくある。その点で、予言者ジョセフの政治に対する考え方は今もって興味深い。

彼は国営中央金融機関の設置を提唱した。しかし、準備銀行制度の一種であるこの方式は1917年になってようやく合衆国で実現されている。

また、ミシシッピ川に水門を設けて航行の便宜をはかるように議会で陳情したが、実現をその目で見とどけることはできなかった。しかし後年、予言者の提案した同じ場所にケオックダムと水門が建設されて、大型船舶が航行できるようになった。

彼は現在着手されつつある刑務所の改革案をも提案した。ジョセフは、社会の法を犯した人々を更生させるために、刑務所を教育の場にすべきだと主張したのである。

ジョセフ・スミスの提唱したことが実施されたと言いたいのではない。宗教に限らず数多くの分野で、彼の考え方が将来を見通す実際のなものであったということを言いたいのである。

向学心

予言者ジョセフには、指導者になりたいと望む人が持たなければならない第二の特質が具わっていた。それは向学心である。

新約聖書の中の少年イエスの話を思い出す方もあろう。イエスはヨセフとマリヤに連れられて過越の祭にやって来た。彼らの一行が過越の祭が終わる前にエルサレムを出発した理由はともかくとして、かなり行ってからヨセフとマリヤは息子がいないことに気がついた。ふたりが引き返してみると、彼は偉いユダヤ人の教師たちの前にいた。イエス・キリストは12の年で向学心に燃えていたのである。

ジョセフ・スミスもそうであった。彼は14歳で真実の教会を捜し求め、答えを得るまで

あきらめなかった。彼の一生を通じて、向学心はひとつのすぐれた特質であった。

彼が多くの言語を勉強したことも、この特質の表われである。彼はヘブライ語について実用的な知識を持ち、ドイツ語聖書を読み、エジプト文字の解読も学んだ。彼は聖徒たちに話した中で、何十もの言語をあげて「もし長生きできたら、全部の言語を修得したいと思う」と語っている。

生ける神への信仰

この向学心も、これからあげる第三の特質がなければそれほど力を持たず、彼を偉大にもしなかったであろう。世間には探究心が旺盛で知性に富んだ立派な男女はいるが、第三の特質、すなわち生ける神に対する信仰に欠ける人が多い。

それは勉学とどのように関連するのだろうか。ジョセフ・スミスは、問題に取り組んで答えが見いだせない時にはよく主に祈ったと語っている。彼は、信仰をもって祈ると「答えが心にはっきりと筋道だって浮かぶので、それが神からのものだ」とわかり、その答えを筆記者に告げた」と語っている。

私たちがどんなに知性豊かであろうと、どんなに向学心であろうと、神への信仰がなければ、多くの領域が閉ざされてしまう。しかしジョセフ・スミスに対してこれらの領域は開かれていた。

彼の信仰を顕著に示すのは、聖書の創世記についての経験であろう。創世記を読む人はだれでも問題にぶつかる。例えば、聖書にはアダムとイブにはカイン、アベル、セツの3人の息子がいたと書かれていて、カインはアベルを殺し、カインとセツが残って人類を存続させたという。しかし、それが不可能なこととはだれにとっても明白である。

ジョセフ・スミスは大きな信仰を働かせて、モーセが記したこの書の原文を明らかにして

下さるようと主に祈った。原典はすでに失われていたが、ジョセフはそれを教えてほしいと主に祈ったのである。それに対して啓示されたものが、私たちが現在持っている高価なる真珠の中のモーセの書である。これは、聖書の研究に多大の貢献をする書物である。

内省力

ジョセフは、だれにとっても大切と思われる第四の特質を具えていた。それは内省の力、すなわち自分を省みて自分を的確に知る力である。

私たちは毎朝鏡をのぞいて、髪を整えたり、化粧をしたり、健康状態を判断したりする。あなたは今までに、自分の心を見ることができたらどんなによいかと考えたことはないだろうか。町で自分に会って、あなたはどのような人ですかとその自分に尋ねることができたらどんなによいかと思ったことはないだろうか。あなたは自分の欠点や長所を知っているだろうか。

予言者ジョセフにはこの特質が具わっていた。彼は自分の弱点も長所もよく知っていたのである。彼は、「私は主のみ手に入るまで、荒けずりの石であった」（「教会歴史」5：423）と述べている。

たいていの人は自分の欠点を隠したがめるものである。教義と聖約の3、6、10、24の各章を読むと、予言者ジョセフは与えられた指示に従わなかったことで主からしばしば叱責されている。狭量な人間ならば叱責されたことなど記録しなかったであろうが、予言者はそうではなかった。彼は自分の誤ちを認め、正したのだった。

ジョセフはモルモン経を翻訳していた時に、自分の英語の能力が劣っていることを知っていた。というのも、教育をほとんど受けていなかったからである。そこで彼は英語を勉強し、自分で初版の文法の間違いを直してから、

モルモン経の再版を印刷にまわした。彼の文才を知りたい人は、教義と聖約の121、122、123章を読むとよい。この美しい文章は努力の金字塔である。

予言者は自分の多くの弱点を認識し、それを克服しようと努めた。記録によると、ある時ひとりの男が家に入ってきて、狂ったようにわめきながら彼をののしった。それを聞いたジョセフは激怒して男をけ飛ばし、家から正面の門まで追い立てた。彼はそれから自分の部屋にひきこもり、自分の行為がいかに予言者らしくなかったかということを日記に書きつけた。それ以来、彼は理性を失うことが一度もなかった。ジョセフは、1838年から翌年にかけて厳寒の冬を、火も満足な食べ物もなくリバティーの牢獄で過ごしていた。そこで聖徒たちが追放され、虐殺され、婦女が乱暴されているという恐ろしい話を聞かされた彼は、主に次のように嘆願した。

「おお神よ、汝は何所^{いずこ}に在したもうや。神の隠家^{おほい}を敵える大幕何所にありや。

汝の御手はいつまで止まり、……」（教義と聖約121：1—2）

それは苦情の祈りであった。しかし主は彼にこう言って答えられた。

「汝はまだヨブの如くにあらず。汝の友だちは、ヨブに為しなる如く汝に向いて争わず、また汝に罪をも負わせざるなり。」（教義と聖約121：10）

主は、人の子が一切のものの下に身を落としたことを語って、「汝は彼より大いなるか」と言われた。その結果、ジョセフ・スミスは二度と不平を言うことがなかった。

人間愛

第五の特質は人間愛である。隣人を愛する心のない人は決して偉大にはなれない。エマがジョセフについて語ったように、彼はひとりで食事をすることがなく、通りから見知らぬ

人を呼んできては食事を分け合っていた（「教会歴史」6:166参照）。記録には、彼が一人一人を守るために戦った話がたくさん残されている。一方彼自身の記録には、互いに非難し合う聖徒たちをいましめる言葉が数多く見られる。

彼の愛を最もよく示すのは、1844年6月の出来事である。すでに主から、敵が命をつねらっていると知らされていた彼は、聖徒たちのために安全な場所を捜して西部へ行こうと決めていた。その彼が妻のエマから次のような手紙を受け取ったのは、ミシシッピ川を渡ってからのことである。「聖徒たちはあなたを臆病者だと思っています。逃げ出すのかと非難しています。」その言葉を読んだジョセフは、次のように言った。「私の命が友人たちにとって全く価値のないものであるなら、もはや私自身にとっても何の価値はない。ハイラム、引き返そう。」（「教会歴史粹」p.374参照）

ジョセフは保安官に身柄をあずける決心を

してノーブーからカーセージに向かう途中、馬上からノーブーの町を振り返り、「ああ、もう一度愛する聖徒たちと話がしたい」とつぶやいた。

道中、スティーブン・マーカムに会い、「ジョセフ、どこへ行くのですか」と問われて、彼は次のように答えた。「われは、今はふり場に引かる子羊の如く行く。されど、わが心は夏の朝の如くに穏かなり。わが良心は神に對しまたすべての人に対しいささかの咎めもなし。」（「教会歴史粹」p.376）

知性、向学心、神への信仰、内省心と向上心、それに人間愛、この5つの重要な特質を具えていたのが、予言者ジョセフ・スミスである。これら5つの特質が、ジョセフ・スミスをこの神権時代の予言者たるべき神のみ手にあるふさわしい器となしたのである。私たちもこれらの特質を伸ばすならば、私たちの召しを果たす上で大いに助けとなることであろう。



ジョセフ・スミスは、生涯、人々との親しい交流を大切にした人である。「彼は兄弟たちに、幼ない子供が清い心をもって親のもとへ行き自分の気持ちを語る、そのような信頼と信仰が必要であると語った。」



アジアに散乱した イスラエル

スペンサー・J・バーマー

朝鮮の石窟庵のほら穴寺にある石像。この背が高く鼻の長いアーリア系、あるいはセム系の人物像は、昔南アジアおよび南西アジアからの影響があったことを示している。これは8世紀に造られたものである。

イ スラエルの子孫はアジアの奥深くにまで散乱しており、東洋の人々は族長アブラハムに与えられた約束の恩恵を受ける正当の世継ぎである。これらのことは、記録として残された聖典、生ける予言者の教え、それに数多くそろっているすぐれた歴史上の証拠が立派に証言している。現在のヨーロッパやアメリカの人種が古代イスラエルの特定の支族の子孫であると書いた人は多いが、イスラエルがアジアに散乱したという可能性について考察した人はあまりいない。

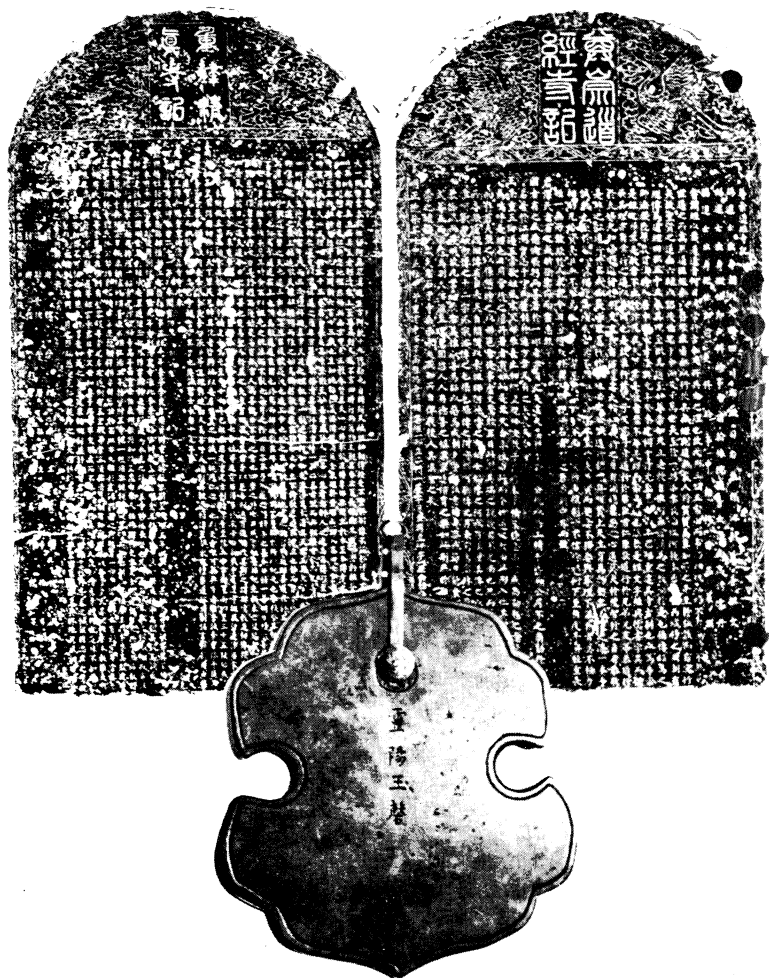
イスラエルの散乱について、主は予言者アモスを通して言われた。「見よ、わたしは命じて、人がふるいで物をふるうように、わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。ひと粒も地に落ちることはない。」(アモス9:9) 聖書に記された次の記録は、この予言が部分的に成就したことを示している。「イスラエルの王ペカの世に、アッスリヤの王テグラテピレセルが来て、イオン、アベル・ベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハズル、ギレアデ、ガリラヤ、ナフタリの全地を取り、人々をアッスリヤへ捕え移した。」(列王下15:29)

ユダの捕囚の多くは帰ってきたが、イスラエルの捕囚はユーフラテス川を越えて北方へ向かい、2度と戻ってこなかった。(エズラ2:1参照)

イスラエルの捕囚の残りの者の帰還について、イザヤは、彼らは地の四隅から集められるであろうと予言している。(イザヤ11:11-12参照)

末日の予言者がこれらの散乱した支族の集合に関心を寄せていたことは、予言者ジョセフ・スミスがカートランド神殿の献堂の時に捧げた祈りから明らかである。

「世のいや極^{はて}までも逐^おい払われたるすべて



上の2枚の圧写は、開封（カイフェン）の最古の記念碑の両面から取ったものである。左の銘刻は1489年のもの、右は1512年のものである。いずれも「イスラエル人の宗教」が漢王朝（紀元前206年—紀元220年）の時代に渡来したことで、12世紀にインドを経由して別の移民が来たことを告げている。

会堂が栄えていた頃、黒い大理石の鐘またはどらが毎日礼拝者に3回の祈りの時刻を知らせた。この鐘は現在王立オンタリオ美術館にある。幅30センチで表面に書かれた4つの漢字は、「霊の精髓のひすいの鐘」という意味である。幾つかの特徴からこれが明王朝に作られたものであることがわかっている。

のイスラエルの家の残れる者たちをして、真理を^{きこ}覽り、メシヤを信じ、圧制を免れて、汝の御前に悦ぶ者とならしめたまえ。」(教義と聖約109:67)

‘予言者の熱烈な祈りに答えるかの如くに、恐れを知らない末日聖徒の宣教師たちがキリストの福音を宣べ伝えるため、すでに1850年にアジア大陸を訪れている。しかし、イスラエルの集合に深い関心を寄せたひとりであるオルソン・ハイド長老も、1970年に日本で開催された万国博のモルモン館で活躍した宣教師の働きを目にしたならば、自分の目を疑うか、少なくとも驚きの目を見張ったことだろう。

初期の時代にソ連の地も伝道活動が進むように奉獻されたが、その時代から今日に至るまで、教会はアジアで急速に発展している。モルモン経はすでにアジアの数カ国語に翻訳されている。アジアにおける改宗者の数は、特に第二次大戦後目覚ましい勢いで増加している。

世界の人口の3分の1を占めるアジア全域において、教義と聖約の冒頭の節にある呼びかけに対する反応が顕著に見受けられる。教義と聖約は次のような言葉で始まっている。

「…汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ、海の島々にある者よ、共に聴け。」(教義と聖約1:1)

極東における伝道活動と平行して、古代および後世数次にわたってアジアに波及したイスラエルの影響に対する関心も深まっている。発見された遺品の内のあるものはイスラエルが散乱した時代にまでさかのぼることができる。このように過去に目を向けることは全世界に広がりつつある今日の教会にとって非常に意義のあることであり、祖先を敬うアジアの人々にとっても極めて重要なことであるに違いない。アジアの諸々の民が福音を喜んで受け入れているのは、アジアの民と散乱したイスラエルとの間に何らかの関係があるためであろう。

マラバル海岸のユダヤ人の手になる古代の

金属版。インドのマラバル海岸のコチンに住んでいる「白いユダヤ人」の一派は、2つの銅版を所有していた。その版には古代のタミール語で、何世紀も前にマラバルを治めていたヒンズーの統治者からジョセフ・ラバンに与えられたある特権のことが刻まれている。ユダヤ人はこの版を最も大切な歴史文書として大切にしていた。そして彼らの憲章、最初の植民証書からなるこの文書は、今日もなお「パンディール」という名で知られる鉄の箱に入れて、「パラデン」という会堂に保管されている。¹

次に引用するのは、これらのユダヤ人が到着した時の出来事を記録したものである。

「第二の神殿が破壊された後に(願わくは神がこれを速やかに再建されんことを)、われらの父祖は征服者の怒り狂った攻撃を恐れてエルサレムを去った。そして多数の男女、祭司、レビ人がこの地に來たのであった。その中には学問と知恵に長じ、名声を得ていた人々もいた。神は民が当時そこを治めていた王の前に好意を得るようにされた。王は彼らにクランガノアという地を与えてそこに住ませた。王はこの地域における族長政治による統治を許可し、貴族としての特典も与えた。そして王から与えられたこの特権は、当時の慣習に従って銅版に刻まれた。これは世の創造から数えて4250年(紀元490年)のことであった。私たちはこの銅版を今も所有している。私たちの祖先はクランガノアに約1千年住んだ。この間、統治した為政者は72人であった。私たちが定住して間もなく、他にもユダヤ人がユダヤの地から來た。その中には、エルサレムのレビ人で非常な知恵者であったラビ・サムエルと、その息子ラビ・エフンダ・レビタがいた。彼らはヨベルの年に使用された銀のラッパを携えてきた。第二の神殿が破壊された時に持ち出したものである。私たちは祖先から、このラッパには口にしてはならない名前の文字が刻まれていると聞かされた。私たちが繁栄していることを聞き及んだユダヤ

人、イスラエル人の支族が、時々スペインや他の所から私たちの所に来て合流した。しかしついに私たちの間に内紛が生じ、首長のひとりがいンドの王に応援を頼んだので、王は大軍を率いて私たちを攻め、家々、宮殿、要さいを破壊し、私たちをクランガノアから追い出した。また私たちの一部を殺し、一部を捕囚として連れ去った。追われた者の一部はコチンに来て定着した。私たちはそれ以来折々大きな変化に身を任せながら今日までコチンにとどまっている。私たちの中には以前からここに住んでいた者のほかに、アシュケナズの国、エジプト、ツォバ、その他の所から来たイスラエルの子らがいる。」²

インドに住んでいるユダヤ人は大きく2つに分けることができる。ひとつはエルサレムのユダヤ人、別名「白いユダヤ人」であり、もうひとつは、いわゆる「黒いユダヤ人」である。

「黒いユダヤ人」は他のユダヤ人よりもはるか以前にインドに来たと信じられている。彼らの皮膚が黒いことと、ヨーロッパのユダヤ人に似ていることから、彼らは西欧のユダヤ人よりも前にユダヤの親民族から離れたものと思われる。「黒いユダヤ人」は、インドや中国の他のユダヤ人の植民地について多くの話を残している。著名な学者クラウディウス・ブキャナンが19世紀に入って間もなくマラバル海岸を訪れた時、彼はそのような65の植民地のリストを文書で入手した。

「過去にこれら多くの植民地を訪ね、またそこへ行こうとしている人々と、私は話す機会を得た。東方に住むユダヤ人たちは絶えず互いに連絡を取り合っていた。彼らの家族は一般に独裁的な君主に従属して特定の場所に定着していた。しかし男たちは商業活動で広い範囲を動きまわっていた。何ヵ国にも及んで旅をしていた。従ってユダヤ人にとって関心のあることが生じると、その噂はアジア全域にすぐに広まるのであった。」³

中国における非中国人。西洋人は東洋人を

皆単一の人種と見る傾向があつて、中国人も、日本人も、韓国人も、タイ人も、インドネシア人も見分けがつかないと思っている。しかし実際にはアジア人などという人種は存在しないのである。アジア大陸は数多くの人種が集まっている巨大な広場のようなものである。

中国人が皆同じ単一の人種から成っているのではないことは確かである。「中国人種」という言葉は、「ヨーロッパ人種」という言葉が正確でないのと同様に正しい表現ではない。山西省と広東省の人を同列に並べるのは、アイルランド人とブルガリア人を並べて彼らの言葉や挙動がよく似ていると言うのに等しい。

中国の種族の系図を調べた^{ロサンゼルス}羅香林教授の研究から、長い歴史の間に数限りない移動が中国の種族間で行なわれたことと、中国人が広く他の民族と結婚したことがわかる。その中には遠く南西アジアの人種も含まれていた。⁴これらの諸民族の中には、セム系の民やコーカサス人の民族がたくさんいた。ロドニー・ギルバートは次のように観察している。「孔子のいた頃、金髪のアーリア系の部族民が、今日の中国北西部に住んでいた。そしてしばしば先祖返りとして明るい眼と明るい色の髪の毛が見られることは、金髪の部族の中に他部族の人々が吸収されたことを立証している。インド人、アラブ人、ユダヤ人、ロシア人の植民が吸収されたのである。……中国の国内には今も異人種としての意識を持ち、中国語以外の自分の言語を維持している非中国人の末裔が何十集団も存在する。ただ彼らも交通が盛んになるにつれて、徐々にではあるが確実に吸収され、あと2、3代もすれば、他の民族と同じ運命をたどって中国人となり、外国に起源を持つ伝統はほとんどなくなってしまうであろう。」⁵

「相異なる」部族間には歴史的な相違があり、それが今日の中国の各地に住む部族をはっきりと分け隔てているのである。タリム盆地に住むオアシスの住民は農耕民であつて、そのまわりに住むアルタイ系の遊牧民とは今

も違っていると、レネ・グローセツトは指摘している。「彼らの外観は今日でも蒙古人とは異なり、コーカサス人種のイラン人に酷似している。」⁶

ユダヤ人の商人とアジアの隊商路。G・F・ハドソンは、ローマ時代のごく初期の頃から中国と地中海世界の間に交通があり、文化と経済面で相当の交流があったことを述べている。漢王朝の時代（紀元前後それぞれ約2世紀）に東南の絹貿易は頂点に達した。この貿易で商人や兵士、捕虜が来て漢民族の間に混じった。男たちは当時中国でしか得られない貴重な品をローマへ運ぶため海路と陸路に命をかけたのであった。⁷

イザヤ書49章12節が書かれる200年前にすでに中央アジアにイスラエルの植民地があったという証拠がある。この49章12節は中国（「スエネの地」⁸）にイスラエル人がいたことを物語っている。中国は少なくとも紀元前1000年頃から西方の世界に門戸を開くことに関心を持っていた。ラクダによる隊商路が古代にすでに存在したことは、もともと中央アジア産のラクダが紀元前2千年に古代バビロニアに知られていたことからわかる。

イスラエルの植民が紀元前720年にイラン人の統治するメデヤの交易都市に達するずっと以前に、中国に至る道は中央アジアを貫くイラン人のオアシス通商村の点在によってすでに開かれていた。そのためイスラエル人は、未知の蛮人と戦いながら進路の定まらない荒地を切り開くという苦勞をする必要がなかった。どのオアシスでも、イラン語を使って、交易を求める遊牧民と接触することができたのである。

ユダヤ人が残した2つの文書の断片はすでに、トルキスタンがユダヤ教にとって重要な地であることを示している。2つの文書の内のひとつは、オーレル・スタイン卿が天山北路のある場所で発見した、四角い楷書書きのヘブル文字で書かれたペルシャの商業文である。これは紀元708年に書かれたものである。

今ひとつは前者より約15年前に、天山南路^{トンプアン}上に位置する東部トルキスタンの古代都市敦煌から出土した1枚の紙に書かれた文書である。これはフランスの学者ポール・ペリオット教授が地中に埋もれた修道院の図書室から発見したもので、古代のヘブル語で書かれていた。これを出版したフィリップ・バーガー、モイス・シュワップ両氏もやはり8世紀の文書であるとしている。ということは、これがこれまでに知られているヘブル語で書かれた文書の中で最も古いものということになる。これは詩篇と予言の書の何節かで構成された簡単な祈とう書である。しかしそれが書かれている紙は、当時中国でしか作られなかったものである。⁹

開封^{カイフエ}のユダヤ人。「散乱したユダ」が中国に定住したかどうかについてまだ正確なことはほとんどわかっていない。西欧人がこの点に関心を持ち始めたのは1605年のことであった。それは開封^{カイフエ}のユダヤ人、^{ウンガイティエン}頼天^{カイフエ}が、イエズス会の宣教師でもあり学者でもあったマテオリッチを北京に訪ねた年であった。それ以来19世紀末まで、外国人はこれらのユダヤ人の後裔に大なる関心を示した。イスラエル人が東アジアで初めて発見された時の様子を語ったリッチ神父の話は、ヨーロッパの世界にとって劇的な新発見であった。それに刺激されてまずカトリックの宣教師が、次いでプロテスタントの宣教師、そして最後にユダヤ人があわただしく調査にやってきた。

開封^{カイフエ}のユダヤ人の社会が初めて発見された時の状況とこの発見から類推されることについて、リッチ神父は次のように報告している。

「私たちは、以下に説明するように、古代のモーセの律法を守って暮らしているユダヤ人を発見した。しかし家族数は少なく、私たちが知る限り会堂は河南省の省都開封^{カイフエ}と浙江省の省都杭州^{ハンチョウ}以外に皆無である。そこ（開封^{カイフエ}）の会堂。記者ルドルフ・ローウェンソール注）にあるモーセの五書には母音点がなく、体裁は昔のものと同じで羊皮紙を巻いたものであ

った。これには旧約聖書の他の書は含まれておらず、後にどのような書が加えられたかを彼らは知らなかった。彼らは割礼の儀式を継承しており、さらに古代のしきたりに倣って豚肉や臍のついた肉を一切遠ざけていた。

北方の省に十字架の崇拝者として知られるキリスト教徒が存在することがわかったのはほんの数年前である。60年前に彼らは戸数がふえ、文芸の面でも軍事の面でも力を持つに至ったので、中国人は彼らを警戒した程であった。彼らは恐らく、他宗派にしばしば敵対する回教徒に備えたのであろう。そこで中国人は彼らを捕縛しようとした。そのため彼らの中のある者は、トルコ人（すなわち回教徒。訳者ローウェンソール注）、あるいはユダヤ人となって逃れた。しかし大部分の者は異邦人となった（中国の儒教、仏教、道教に改宗した。訳者ローウェンソール注）。彼らの教会は偶像を祭る寺に変えられ、子孫は食物や飲み物をとる時に十字のしるしを手で示す習慣を維持したが、十字を崇拝する者の子孫であることを口にすることは望まなかった。そのため今日彼らの間にも他の者の間にも、どんな時に十字を切るのか知る者がいない。しかし

この象徴は、彼らが中国にきた外国人の子孫であることを明確に示している。」¹⁰

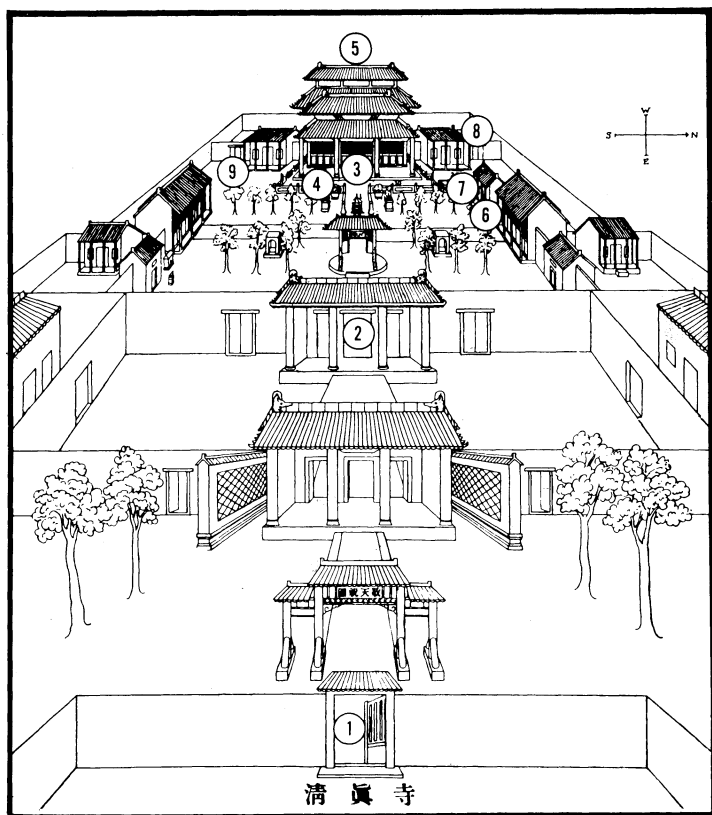
リッチ神父の著した本が河南省出身で姓を^{アイ}艾というユダヤ人の手に渡った。「天の王」だけを礼拝する外国人が中国にいることを知ったこのユダヤ人は、彼らがモーセの律法を守る人々であるに違いないと確信して、祭司の家を捜した。この訪問によって開封に^{カイフエン}10ないし^{カイフエン}12の家族がいること、そして開封に美しい会堂のあることがわかった。会堂には中庭、別棟、それに洗いや沐浴が行なわれる中央の囲い地が北側にあった。南側には会堂の係の者が規定された方法により、動物を殺す屠殺場があった。開封のユダヤ人は、羊皮紙に書かれ、5つの巻物になったモーセの五書を崇敬の念を持って保管していた。¹¹ また、杭州やその他の場所にも少なくとも600年前からユダヤ人が住んでいたのであった。

ユダヤ人の子孫であるこの中国人は、おもしろい発音をまじえて旧約聖書の話をつくさんした。例えば、エルサレムのことをヘイルソロイム、まだまだこれから降臨しようとしているメシヤのことをモシキアと言った。自分^{カイフエン}はヘブル語を知らないが、開封には知っている人がたくさんいる、とも語った。

日本に残るイスラエル人來訪のなごり。アジア大陸の東沿岸に位置し、2,400キロの長さを持つ日本列島は4つの大きな島と数百の小さな島からなっている。この島々は古代イスラエルの故国からはるか遠く離れている。しかしこの島々には海から訪れることができるので、地理的に広く様々な所から人々が来て定住することが可能であった。そのため多くの^{カイフエン}人々がアジア大陸から来た。また東南アジアの海岸地方やポリネシアからも人々が来た。¹²



アメリカ人の画家ベティ・ブライアンによるこの漢口（ハンコウ）の中国系ユダヤ人の絵は、ヘブル人が世界中に放浪し定着したことにより人種が融合したことを明瞭に告げている。



カイフェン

開封にある会堂の外観

1. 周族の記念門(牌楼^{パイロウ})。この門をくぐって会堂の前庭の中央門に達する。この記念門は第一の、あるいは外庭の中央に位置している。(II部, VII章)
2. 第二門。両方に開く扉がついている。
3. 前の大広間
4. 前の大広間の東側のテラス。この台の上に仮庵の

祭のためにむしろの小屋が建てられた。その周囲に白い大理石の欄干があったが、会堂が破壊された時に儒教の寺に持ち去られ、そこで同様の目的で使用された。

5. 後の大広間。成化帝の時代(1465—88年)にこの広間の西端部、すなわち背後に3つの部屋が建て増しされた。神聖な書き物を入れた箱や四角い聖文、種々の書き物、その他会堂の最も神聖な部分に関係する品々がここに置かれたことは明らかである。この広間はさし絵では見えないが、屋根付きの廊下で前の広間とつながっている。
6. 厨房。ここでユダヤ教による食物の正式な処理も行なわれていたものと思われる。
7. 周囲に石の井げたのある井戸。さし絵には出てこないが、この近くに沐浴のための建物があった。
8. ユダヤ教の創始者アブラハムの広間
9. 聖なる族長たちの広間

最も初期の定住者の中にアイヌがいた。アイヌは現在日本の北部にごく少数生き残っている白人種である。また、中国や韓国と同じように、皮膚が赤みがかった、鼻の高いセム系やアーリア系の民族も渡っている。¹⁴ はるか昔に日本列島に移り住んだ数多くの民の中に古代イスラエルの子孫が含まれていたことに疑いをはさむ余地はない。

(バーマー博士はブリガム・ヤング大学アジア学の学部長であり、宗教教育部で歴史と宗教の教鞭を取っている。以前アジアで従軍牧師を務め、韓国伝道部長にも召されている。講演や著述活動も盛んで、最近、「アジアの教会」と題する本を著している。シャロン・イーストステーク部エッジモント第8ワード部で日曜学校の教師をしている。)

☆

☆

脚 注

1. ウォルター・J・フィッセル『マラバル海岸のコチンにおけるユダヤ人文化の遺跡発掘』「アメリカ東洋協会誌」第87巻(1967年) pp. 230—48参照

2. クラウディウス・ブキャナン、「アジアにおけるキリスト教の研究」への引用文

3. 同上, p. 225

4. 『中国人の系図研究』「補足および報道」第14巻第1号, 1966年11月。ウォルフラム・エバーハート「中国東部および南部の文化」(1968年)でも、中国初期の広範な人口の変動が外国の侵入と関連づけて取り上げられている。

5. ロドニー・ギルバート、「中国に何が起っているか」(1926年) p. 51

6. 「中国の起源と隆盛」(1953年) p. 70

7. G・F・ハドソン、「初期の時代から1800年に至るヨーロッパと中国の関係の調査」(1961年)。7世紀に描かれた絵画に服装や容貌からはっきり西洋人とわかる人々が描かれている。このことはジェーン・ガストン・マラーが「中国唐王朝の小立像に見られる西洋人」の中で触れている。

8. 数種の綴りで表記される地名「スエネ」は、紀元前の中国全体を指す西洋に共通の言葉である。この語は紀元前221年と206年の間に中国を制圧するに至った小国「秦」の国名からきている。

9. アレン・H・ゴッドビー、「失われた十支族の謎——ヘブル人の歴史は書き直さなければならない」(1930年) p. 39

10. ルドルフ・ローウェンソール『初期の時代に中国にきたユダヤ人』「民間伝承」5巻, pp. 393—95

11. ウィリアム・C・ホワイトは中国にいるユダヤ人のなごりを1919年に徹底的に調査している。彼の発見は、初めトロント大学出版部によって出版され、1966年に「中国のユダヤ人」という題でニューヨークのパラゴン出版社によって再刊された。ホワイトはまた図解付きの記事「中国のユダヤ人」を「アジアマガジン」(1936年1月, pp. 54—61)に掲載している。

12. 今日の日本が人種、文化共に多種の混合であり、太平洋の島々からも若干の流入があったことに言及するに当たっては、ハゴツや他の海の探検家がアメリカ大陸の海岸から太平洋に出て、「その後何の音沙汰もなかった」(アルマ63:5—8)ことが思い起こされる。あの有名なコンチキ号の探検の背後にある理論を証明するために、トール・ヘイエルダールは「太平洋のアメリカインディアン」(1952年)という本の中で、昔太平洋に向かう航海はアメリカから西へ航路をとる傾向が強かったことを述べている。彼の資料はこのような航海が東南アジア、中国、韓国、日本に及んだことを明らかにしている。

「大和の日本人」と土着のアイヌ人の接触、前者が後者を主流である日本人種にまた日本文化に吸収しようと努力したことは、ジョン・A・ハリソンの「北日本のアイヌ」(1960年4月)に述べられている。彼らの宗教上の伝統については、ニール・G・ムンロ著「アイヌ人の信仰、祭式」(1963年)参照

13. 昔韓国人と南西アジアの民族の間に関係があったことは、韓国慶州にある吐谷山^{トーハム}の石窟^{ソック}庵^{ラム}のほら穴寺の壁面に描かれている鼻が長く、背が高くてやせた人物の像が最も生き生きと示している。この壁面が描かれたのは、8世

紀のことである。ある学者は「この人物像はユダヤ人の特徴をはっきり呈している」と述べている。チャールズ・アレン・クラーク「古代朝鮮の宗教」(1932年)p. 58参照。これを支持する違った種類の証拠が、E・A・ゴードン著『朝鮮の寺で行なわれた最近の発見と初期の東方教会との関係』「王立アジア協会紀要」(第5巻第1号, 1914年)pp. 1—39に掲載されている。

14. ヘブル人の影響を受けた日本の工芸品については、以下のものが特に興味深いであろう。ハーマン・ディッカー「極東における放浪者と移民：中国、日本におけるユダヤ人の生活」(1962年)pp. 156—60。古代日本の神話を取り上げた拙稿『キリストは日本を訪れたか』「ブリガム・ヤング大学紀要」(1970年冬季)pp. 135—60。アーサー・ロイド「日本の信仰。日本仏教の歴史概要」(1911年)pp. 49—55, 219

☆

☆

新たに建設される神殿



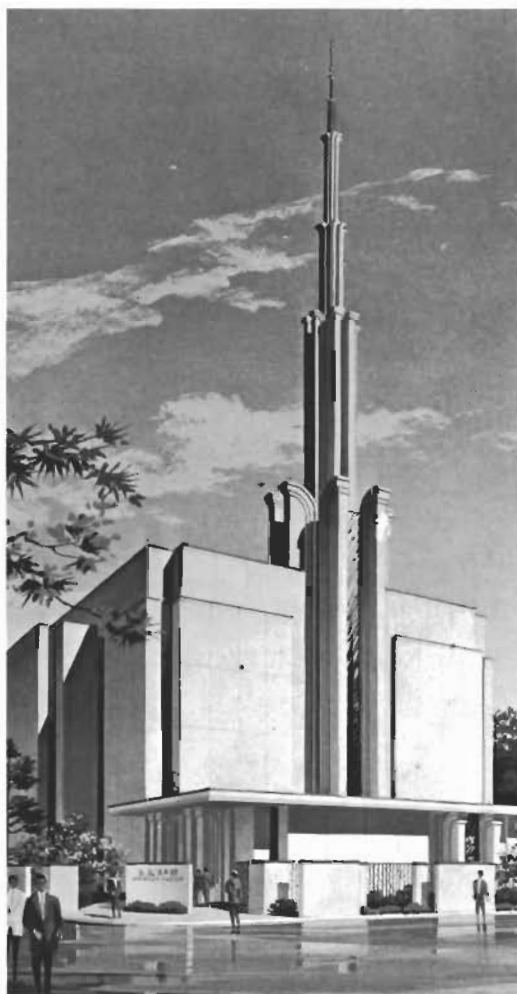
メキシコ神殿



サンパウロ神殿



シアトル神殿



東京神殿

